

平成25年度 学生地域参画プロジェクト報告書

平成25年度 学生地域参画プロジェクト報告書の刊行にあたって 茨城大学地域連携推進本部長 田中 健次	1
平成25年度学生地域参画プロジェクト申請一覧	2
平成25年度 実施プロジェクト	
○茨城大学地域活性化プロジェクトチーム「さとみ・あい」 (代表者：人文学部・3年 出口 貴仁)	3
○茨大×東北～♣Fleur♣～プロジェクト (代表者：教育学部・4年 滑川 裕乃)	8
○大洗おしゃべり広場プロジェクト (代表者：人文学部・3年 河野 聖史)	10
○のらボーイ&のらガールの食農教育プロジェクト － No Food, 農 Life － (代表者：農学部・3年 大野 莉沙)	14
○ビブリオバトル in 常陸太田実行委員会 (代表者：人文学部・4年 芦田 真子)	21
○歌う！繋がる！響きあう！ ～水戸芸術館との協働による音楽文化の振興と発信～ (代表者：教育学部・4年 角田 葵)	26
○大洗応援隊！ ～情報発信基地&人と人をつなぐ場所「ほげほげカフェ」～ (代表者：教育学部・3年 小野寺 藍)	29
○大子町における、地域活性化プロジェクト (代表者：理学部・3年 相良 祐希)	35
○あかりアートプロジェクト (代表者：教育学部・3年 鳥居 美伸)	40
○茨城大学地質情報活用プロジェクト －茨城県北ジオパークを通じた地域貢献－ (代表者：理学部・4年 前田 知行)	45
○「障害のある人への就労支援プロジェクト ～地域と障害のある人とのつながりをつくる～」 (代表者：人文学部・3年 星川 知世)	51
○異文化交流プログラム (代表者：人文学部・2年 星野 由季菜)	59
平成25年度優秀プロジェクトの選出	64
(参考)	
平成25年度「学生地域参画プロジェクト」応募要項	65

平成25年度学生地域参画プロジェクト報告書の刊行にあたって



今年度で9冊目となる『学生地域参画プロジェクト報告書』が刊行されました。ここにお届けいたします。そして最初に、このプロジェクト予算が、地元企業や個人、本学教職員・同窓生からのご寄付によって形成される「茨城大学社会連携事業会」の資金援助を受けておりますことを申しあげ、改めて、ご支援をいただきました皆様方に心より厚く御礼を申しあげます。

今年度の学生地域参画プロジェクトでは、21件の応募（平成24年度は17件）がありました。今回はその中から12件（平成24年度10件）のプロジェクトが採択されました。残念ながら採択されなかったプロジェクトも含め、例年、学生たちの企画は、教育・研究、ボランティア、地域交流・振興、国際交流等、多岐にわたっています。採択されたプロジェクトの成果は、昨年度に引き続き、2月17日に学生たち自らのプレゼンテーションによって成果報告がなされ、多数の審査員による審査を経て、三つの優秀プロジェクトが選ばれました。

以下の三つがその内容です。

- ①茨城大学地質情報活用プロジェクト－茨城県北ジオパークを通じた地域貢献－
- ②のらボーイ&のらガールの食育教育プロジェクト－No Food, 農Life－
- ③大洗応援隊！～情報発信基地&人と人をつなぐ場所「ほげほげカフェ」

タイトルをご覧になれば、ご理解いただけると存じますが、①は理学部、②は農学部、そして③は教育学部や人文学部の学生たちが主となったプロジェクトです。それぞれ学部の特性がよく映し出されています。①は「地質遺産の観光化」による地域の活性をめざすものですが、今回で4回目となるプロジェクトです。このプロジェクトは着実に地域や地元企業と結びつき、それら自治体や団体と「互助関係」になるまでに育っています。

②は今年度初めての企画ですが、農学部の学生ならではのアイデアに満ちたプロジェクトでした。③も継続したプロジェクトですが、「人と人とをつなぐ場所」の提供だけではなく、大洗を訪れる方々に向けた観光マップの作成をおこない、地域情報の発信にも一役買っていました。また、なによりも地元の方々の「癒し」となるプロジェクトとして、地域から評価を得ております。

ところで「みる」という動作に充てる漢字は数多くあります。「見る」「視る」もそうです。「見る」という動作は「ちらっとみる」、つまり表層的にみるという意味です。一方の「視る」は、その対象が成立するまでになにがあったのか、その結果どうなっていくのか等、いわば「思考」ともなってみる行為を意味します。

学生たちは日々大学で学んでいます。ただしその学びには「現実社会での実感」がともなわないために、ときに知的理解のみで終わることもありません。すなわち「見る」学びだけで終わってしまうこともある、ということです。しかし、学生たちが今回のようなプロジェクトという「体感」を通して、改めて大学の授業に臨みますと、それまでの「見る」という学習態度は「視る」学習態度へと質的転換を果たします。このように学生プロジェクトは、学生の「社会貢献」だけではなく、反面では学生自身の学びの転換のきっかけになっています。それは一般公開されている「プロジェクト報告会」からも、明確にみとれます。

こうした茨城大学の学生プロジェクトが、さらに地域に役立ち、また地域から学生たちが学ばせていただく機会である、と再認識していただき、今後ともご支援をお願い申しあげます。

2014年3月

茨城大学地域連携推進本部長 田中健次

平成25年度「学生地域参画プロジェクト」申請一覧

No.	活動分野	代 表 者		プ ロ ジ ェ ク ト 名
		所 属	氏 名	
1	2,4	人文学部3年	ヨシハラミオ 吉原美緒	FLEAIマーケットーエコローカルー2013
2	4	工学部4年	タケダナオヤ 武田直也	ペーパークラフト風車による環境教育を通じた地域貢献と再生可能エネルギーの地域啓発
3	2,4,6	人文学部2年	ニシカワユマ 西川友麻	「みとなび」プロジェクト
4	2	人文学部3年	マチダリョウ 町田 亮	ふくしまキッズ・スマイルアゲイン
5	4	人文学部4年	ミウラタクマ 三浦拓真	常陸大宮市美和地区における「美和オルレ」の社会実験による地域振興の推進
6	3,4	人文学部3年	テグチカカヒト 出 口 貴 仁	茨城大学地域活性化プロジェクトチーム「さとみ・あい」
7	2	教育学部3年	ナメカワヒロノ 滑 川 裕 乃	茨大×東北～✿Fleur✿～プロジェクト
8	4,5	人文学部3年	コウノキョシ 河 野 聖 史	大洗おしゃべり広場プロジェクト
9	1,4	工学部4年	イイムラシュウジ 飯 村 秀 士	学生フォーミュラ活動による地元企業の活性化と技術伝承
10	1,2,3,4	農学部3年	オオノリサ 大 野 莉 沙	のらボーイ&のらガールの食農教育プロジェクト ー No Food, 農 Life ー
11	4	人文学部4年	アシダマコ 芦 田 真 子	ビブリオバトル in 常陸太田実行委員会
12	1,3,4	教育学部4年	カクタアオイ 角 田 葵	歌う！繋がる！響きあう！ ～水戸芸術館との協働による音楽文化の振興と発信～
13	2,4	教育学部3年	オノデラアイ 小野寺 藍	大洗応援隊！～情報発信基地&人と人をつなぐ場所「ほげほげカフェ」～
14	1,2,3,4	理学部3年	サガラユウキ 相 良 祐 希	大子町における、地域活性化プロジェクト
15	1,2,4	教育学部3年	トリイヨシノブ 鳥 居 美 伸	あかりアートプロジェクト
16	1,4	理学部4年	マエダトモユキ 前 田 知 行	茨城大学地質情報活用プロジェクトー茨城県北ジオパークを通じた地域貢献ー
17	1,2,3	理学部2年	アラノカツユキ 荒 野 勝 幸	生きものひたち紀行
18	1,3,4	人文学部3年	ホシカワトモヨシ 星 川 知 世	「障害のある人への就労支援プロジェクト～地域と障害のある人とのつながりをつくる～」
19	3,4,5	人文学部2年	ホシノユキナ 星 野 由 季 菜	異文化交流プログラム
20	4	教育学部4年	サイトウナオヒデ 斎 藤 直 英	水戸ホーリーホックを応援支隊プロジェクト
21	3,4	工学部3年	タマダヨシノリ 玉 田 泰 庸	エコノパワー競技クラブ～ものづくりを通しての地域交流～

※ [活動分野]：1 教育・研究 2 ボランティア 3 課外活動 4 地域交流 5 国際交流 6 その他
 ※報告書に記述されている所属・学年・組織名・市町村名等は、平成25年度時点のものとなっております。

※ のプロジェクトが採択・実施したプロジェクトです。

茨城大学地域活性化プロジェクトチーム 「さとみ・あい」

ボランティア

地域交流

教育・研究

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 3年 出口貴仁

連携先

常陸太田市役所、地域おこし協力隊

顧問教員

蜂屋 大八 准教授（大学教育センター）

※8月末まで

鈴木 敦 教授（人文学部 教授）

※9月以降

参加メンバー

人文学部

人文コミュニケーション学科

岩 瀬 有 紀 2年

櫻 井 佑 香 2年

千 葉 美 香 2年

宮 本 沙 輝 2年

岡 本 萌 3年

久 慈 望 美 3年

白 土 可奈子 3年

森 拓 哉 3年

鈴 木 愛 美 4年

番 場 有 彩 4年

人文学部社会科学科

天 内 ありさ 2年

井 上 紗 希 2年

片 寄 美 紀 2年

住 谷 美 樹 2年

板 垣 里 沙 3年

伊 藤 美保子 3年

工学部

メディア通信学科

江 畑 一 輝

工学部知能システムB学科

佐々木 え り

プロジェクトの申請内容

●プロジェクト概要

人間本来の豊かさ、人と人とのつながりの暖かさがある、それが常陸太田市里美地区である。たくさんの魅力が存在する里美なのだが、過疎化、高齢化といった問題を抱える地域でもあり、その魅力を生かし切れていないのが現状である。そういった現状を打開すべく、立ち上がったのが私達、チーム『さとみ・あい』である。このチーム『さとみ・あい』の中には、3チーム存在し、2012年度から活動をスタートさせていた里美café、里川かぼちゃチーム、そして今年度より発足した里美トラベルチームである。これら3チームを柱とし、特に、「学生という若者の視点を生かしPRする」というコンセプトを軸に、地域住民と密接にかかわり合いながら、里美の特産品を使った商品開発、出店活動、里美のパンフレット作り、などの様々なPR活動を行ってきた。

●目的

茨城県常陸太田市里美地区の魅力のPR
《本年度の目標》

『里美の魅力を多くの人に伝える！！』

去年の活動から得た、里美の魅力を積極的に様々な人に発信していく。そして、魅力を精力的にPRすることで、少しでも里美へ訪れるきっかけを生み出したいと考えており、以下のことを目標とする。

①イベント出店

- ・里美の産品を来場者に提供し、魅力を伝える
- ・来場者に、直接里美の魅力を語る

②パンフレット作成

- ・里美特有のパンフレットを作成し、広報手段として用いる

③里美合宿を開催

- ・実際に里美へ宿泊し、参加者に里美の魅力を感じ、体感してもらう

●期待される成果

本プロジェクトの活動により期待される成果は以下の2点である。

- ①学生が積極的にPRしていくことで、里美の地域活性化につなげる
- ②学生と地域住民といった広い世代間での情報交換の場ができる

地域活性化とは、短期間では目に見える成果というものは、あまり見えてこない部分も多く、こういった活動を継続し、長期的なプランニングをすることで、結果として表れてくるのだろうと考える。

プロジェクトの実施概要

5月	里美訪問
6月	里美訪問（宿泊）
7月	パンフレット作成開始、里美訪

	問 各種MTG
8月	里美合宿（1回目） パンフレット素材集め かわらばん作成開始
9月	ONE DAY CAFÉ開催 かわらばん1号配布 パンフレット原稿完成 里美女子旅ツアー開催
10月	里美合宿（2回目） かわらばん2号配布 パンフレット配布開始
11月	茨城キリスト教大学文化祭出店 茨城大学文化祭出店 里美訪問 かわらばん3号配布
12月	ファーマーズマーケット出店
1月	里美にて活動報告会



「広報用かわらばん」

プロジェクトの成果報告

●今年度得られた成果

◇広報手段の獲得

昨年度の活動より、里美のパンフレットがないことが問題点だと感じ、今年度はパンフレット作成に主眼をおいた。パンフレット作成にあたっては、素材、レイアウトなど細かい部分に気を配り、「里美を日帰りで楽しむ」ということをコンセプトにした。パンフレッ

ト完成後は、イベント出店の際に精力的に配り、特に、パンフレットの内容を口頭で説明することを欠かさずに行った。来場者の中には、パンフレットを参考に、里美を訪れたい、と言ってくる方もいらっしや、広報媒体の強さは大きいものだと改めて実感した。今後も、パンフレットは改良を加えつつ、PRの手段として使っていきたい。



「里美パンフレット」

◇生の参加者の声を聴く

里美の魅力を伝える大きな手段としては、出店・広報といった2次的なものだけでなく、直接訪れることが何よりも大切であると感じ、実施した。

実施日 10月26～27日（1泊2日）に開催

参加人数 30名

（チームメンバー12名
非チームメンバー12名
茨城キリスト教大学生2名
常磐大学生4名）

この合宿では、里美の魅力を伝えるために、多くの仕掛けを盛り込んだ。

里川かぼちゃの収穫、その他里美産品の収穫、夕飯は全員で自炊 里美散策、宿泊は古民家、地域住民との交流など、里美にある魅力のある数々を可能な限り、実施した。

しかし、ただ実施しただけでは意味がないと

考え、合宿の最後に反省会を行い、率直な意見を参加者(非チームメンバー及び他大学生のみ)にアンケートとして書いてもらい、集計した。

アンケートの質問は以下の通りである。(すべて記述式の質問)

- 1、里美に来て、率直に感じたことはなんですか？
- 2、古民家、カボチャ収穫、里美散策を通してどのようなことを感じましたか？
- 3、もしプロジェクトメンバーなら、どのように里美をPRしていきますか？
- 4、この合宿を通して一番印象に残ったことは？

これより、アンケートの回答（4のみ）の一部を紹介する。

- ・「古民家に泊まり昔の人の暮らしを少し体験できたこと。なかなか体験できることじゃない。」
- ・「かぼちゃの収穫が印象的。農業というものに触れてこなかったのが楽しかった。もし植えるのもできていたらもっと思い入れがあっただろうと思った。」
- ・「高齢者が多く、若者も今回の里美関連の人以外は見る事がなかったという点が一番印象に残った。今の高齢者が里美から消えてしまったら里美はどのようになるのかな？という危機感みたいなことを感じました。」
- ・「食べ物おいしいということだ。お茶は静岡、リンゴは青森、というイメージが強かったが、里美も負けてないな、と思った。里美の他にも、今回は他大学生との交流があるということで、貴重な体験ができたと思う。」
- ・「古民家では夜が寒くて大変だった。いろいろの体験をしたことがなかったので、それはとても素晴らしかった。カボチャの収穫では色の違うカボチャを手でふれ、収穫するという体験ができたのでよかった。管理が大変だと思った。里美散策では昔から言い伝えや田畑の分布について知ることが出来てよかった。車

の量が圧倒的に少ないので人の少なさが目に見えて分かった。そして、祭りが出来ないほど若者が減ってしまっていることに悲しさを覚えた。しかし、里美に人たちの里美のための雰囲気づくりができていて素晴らしいと思った。」

上記のようなアンケート結果より、参加者は里美での合宿を通して、何かしらの魅力を感じてくれたのではないかと、考えられる。また、「他にこういったこともしたかった」、「もっと～をしたかった」といった、1泊2日では物足りないといった回答もあり、こういった意見を来年度に生かしていきたい。

◇イベント出店におけるPR活動

イベント出店は、去年より継続して行ってきた活動ではあるが、今年度はより「PRする」ということに主眼をおいた。もちろん、里美の産品を多く売り、売り上げをあげることも大切だが、そのことにとらわれすぎず、来場者一人ひとりに対して、積極的に自分たちの知る里美の魅力を伝えるように心がけた。イベント出店の回数を重ねるうちに、数としてはまだまだ少ないが、毎回来てくださる来場者もおり、少しずつではあるが、里美の知名度を上げられているのではないかと考えられる。



「茨城キリスト教大学文化祭出店」



「茨城大学文化祭出店」



「味覚際にて出店」

●外部評価

水戸NHK	11月15日	出演
茨城新聞	11月7日	掲載
茨城新聞	9月11日	掲載
茨城大学広報誌「iUP」	vol.3	掲載

●目標達成度合

今年度の目標に対する達成度合を以下のように評価する。

『里美の魅力を多くの人に伝える！！』

達成度 → ○
 成果 → △

上記のような評価をした理由として、PRをすること自体は、活動として多くのことを行ってきたからである。パンフレット作成、イベント出店、里美合宿開催、など、昨年度では実施不可能だと思われていたことを実現できた、そういった意味で○とした。

しかし、成果は△である。地域活性化は長期的なプランで考えていくものであるにしても、もっとPRから里美への訪問客アップへつなげる何かがあってもよかったのではないかと考える。活動を増やした反面、スケジュールに余裕がなくなり、アフターサービスのほうまで手が回らなかったからである。



今後の展望

今年度は、猪突猛進、この四字熟語が似合う1年だった。里美の魅力をPRするあらゆる手段を試し、多くの知見を得ることが出来た。

今後は、PR後の里美への訪問客アップも視野に入れ、計画的に一つ一つの活動をこなしていくことを心がけていきたい。また、より、里美の地域住民との交流を増やし、さらに里美の魅力を知っていきたいと考える。



茨大×東北～*Fleur*～プロジェクト

ボランティア

代表者：教育学部教育基礎学科 4年 滑川裕乃

連携先

主に東北に住む被災地域の人たちとの連携

顧問教授

三輪五十二教授（特命教授）

参加者

滑川裕乃	教育学部・教育基礎学科 4年
番場有彩	人文学部・人文コミュニケーション学科4年
白土加奈子	人文学部・人文コミュニケーション学科3年
両角智則	人文学部・人文コミュニケーション学科2年
福島想人	工学部・機械工学科2年
保母真史	人文学部・社会科学科2年
木村亮	工学部・機械工学科2年
高橋諒	人文学部・社会科学科2年
石川航平	人文学部・社会科学科2年
清水麻美	人文学部・社会科学科2年
吉田有希	人文学部・社会科学科2年
飯田大貴	工学部・機械工学科2年
高橋健大	工学部・メディア通信工学科1年
サイ・センジョ	人文学部大学院1年

プロジェクトの申請内容

ボランティア活動を単発で終わらせず、風化させないために継続して活動を行うことが目的である。今までのボランティア活動だけではなく、被災地の方との交流など人と人との交流を増やし、茨城大学として自分たち学生にできることを継続して行うため。

プロジェクトの実施概要

■ 8月31日 福島県南相馬市でボランティア活動

・これまで立ち入ることが出来なかったが今回初めて南相馬市で活動。(放射線など現地の正しい情報を得てから活動を行った)

■ 9月17日・18日（1泊2日）ボランティア活動36名の茨大生が参加

- ・1日目＝福島県南相馬市の視察
 - ・6月9日に行った千年希望の丘植樹祭の会場を
 - ・ゆりあげ地区
 - ・語り部さんのお話
 - ・ワールドカフェ（ワークショップ）
- テーマ「ボランティアで活かせる茨城大学の強みとは？」

・2日目＝野蒜海岸の清掃（東松島市）

■ 10月飯舘村へ視察

■ 10月24日 学生交流会の開催

- ・生協グリルにて学生交流会の開催
- ボランティアに関心のある学生同士の交流の場を設ける
- ・今までボランティアに参加したことがある学生だけではなく、興味がある学生にも呼びかけ、交流し話し合いの場を設けた。

■ 11月茨苑祭

- ・ 県立医療大学など他大学との交流
- ・ がれキーホルダーの販売→売り上げの一部が作成した陸前高田の人たちのもとへ
- ・ 写真展

■ 12月21日 28名の学生とともに宮城県東松島市へ

- ・ アーモンドの苗木を寒さから守るため藁を使って防寒・防雪対策
花言葉は「希望」、10年以上前の被災地である阪神から送られてきたものである。
- ・ 2ヶ月ぶりに被災地を訪れ、復興が着々と進んでいることを実感

■ 1月26日 「ふくしま再生への道—放射線とたたかう人たち—講演会」

プロジェクトの実施概要

■ 9月1泊2日のボランティア活動

- ・ 福島県南相馬市へ視察
- ・ 東松島市でのボランティア活動の継続

■ 10月飯舘村へ視察

- ・ 現地の生の情報を得ることが出来た。実際に訪れたことで、今後の活動の課題が見えた。
- ・ 現地の人との交流が持て、学生に来てほしいとの依頼も受けた→往復10時間以上かかり、また山道が狭いことなどから学生を連れてバスで行くことは困難と判断。しかし、TwitterやFacebookで活動を報告し、多くの人に興味を持ってもらうことが出来た。

■ 11月茨苑祭の成果

- ・ 県立医療大学など他大学との交流。
- ・ がれキーホルダーの販売→売り上げの一部が作成した陸前高田の人たちのもとへ
- ・ 写真展→約300枚の写真を展示し、また大きいパネルを用いて写真を展示。学生の活動風景などリアルに被災地の様子を伝えることが出来た。震災に関心のある人だけではなく、文化祭に訪れた多くの人に知ってもらうことが出来た。

- ・ 地域の人たちに現地の様子とともに、私たちの活動について知ってもらうことが出来た。

■ 12月ボランティアに関心のある学生交流の場を設ける

- ・ 今までボランティアに参加したことがある学生だけではなく、興味がある学生にも呼びかけ、交流し話し合いの場を設けた。
- ・ 自分たちにできることなど話し合い、またFleurメンバーを増やすこともできた。

■ 1月ふくしま再生への道—放射線とたたかう人たち—講演会

- ・ 茨城大学の生徒、農学部との協力、また他大学の教員、一般の方たちの集客に成功
→多くの人たちと交流が持て、意見交換が出来た。
- ・ 茨城新聞に掲載
- ・ 風化させないことにつながった

■ ボランティアに関心のあるメンバーの増加

- ・ プロジェクト開始当初は中心メンバーが8人だったが、現在は15名に増加。また、2年生メンバーの増加により今後の継続性の期待
- ・ Fleurのボランティアバスに参加した学生の延べ人数は320人超。いかに影響が大きいかが、また学生の関心がどれくらいあるかが把握できた。

■ 被災地とともに学校の花壇にも花植えを行う

- ・ 正門入って直ぐにチューリップの球根を植える (H25.12月) →花いっぱいプロジェクトの実行、花を通して来年につなげる。

大洗おしゃべり広場プロジェクト

地域交流

国際交流

代表者：人文学部 人文コミュニケーション学科 3年 河野聖史

連携先

大洗国際交流協会
(大洗町役場 まちづくり推進課)

生の町づくりを応援する。

顧問教員

金本節子(人文学部 教授)

●連携の方法

現在、大洗町役場・大洗国際交流協会では日本人と外国人住民が気軽に交流できる場を目指して大洗おしゃべり広場を二年間継続しており、5月の役場の総会で本年度も開催することが決定している。本年度は昨年度までの課題としてあがっていた参加者の増加を第一の目標として取り組み、周知、増員、継続という三つの目標に向かって活動する。私たちは7月から2月の毎月第一日曜日(8月、1月は除く)に開催されるおしゃべり広場を大洗役場と共催し、協会活動の周知に努め、活発な地域交流・国際交流の場の構築を目指す。また、モノづくりを共有し、大洗町のワンコインツアーに参加するなど、商店街の方々も巻き込んだ国際交流活動、多文化共生のコミュニケーションの実現に向けて、体験型異文化コミュニケーション活動を実践する。

参加者

伊藤真衣(人文学部人文コミュニケーション学科3年)

大江友麻(人文学部人文コミュニケーション学科3年)

岡地恵理(人文学部人文コミュニケーション学科3年)

椎名絢加(人文学部人文コミュニケーション学科3年)

中村夏美(人文学部人文コミュニケーション学科3年)

ヌルーマラー・デヴィ・フィトリア
(交換留学生)

ネランダ・アザニア・アコ
(交換留学生)

●実施計画

- ・外国人のための各種多言語サインボードの作成：外国人留学生の協力により外国人住民のために多言語のサインボードを作成する。
- ・日本文化の紹介：日常生活の中の日本文化や日本料理を紹介することで異文化間の相互理解を深める。和のものづくりや料理教室といった形で来場者参加型の活動を企画

プロジェクトの申請内容

●プロジェクト概要

このプロジェクトは、大洗国際交流協会と連携し、大洗町在住の外国人と日本人町民を中心とした地域交流を行う。異文化コミュニケーション能力を生かして、互いの文化を知り、受け入れることで外国人と日本人のコミュニケーションを円滑にし、大洗の多文化共

する。

- ・異文化かるた作成：異文化理解や大洗町紹介を題材に参加者全員でかるたを制作する。
- ・やさしい日本語の実践：外国人の方々とやさしい日本語でコミュニケーションをとり、ホワイトボードを利用して、問題点を指摘・改善し、漢字学習の期待にも応える。

●期待される成果

外国人住民が日本での日常生活に必要な知識や日本語能力をやさしい日本語による学習実践を通して獲得することができる。日常レベルでの文化紹介や来場者参加型の企画を多く行うことで地域住民の参加意欲が高まり、本年度の目標である参加者の増加が期待できる。さらに日本人と外国人が協働活動（かるた作り、料理作りなど）を通して、新たな発見や相互理解を深め、多文化共生の意識と多文化コミュニケーション能力を高めることができる。

プロジェクトの実施概要

●実施内容

- ・各国の文化紹介（日本、インドネシア、イギリス、タイ）

約30分程、各国の文化を紹介してもらう時間を設け、茨城大学の留学生や大洗町に住むALTの先生、筑波大学の留学生がそれぞれの国の文化や言語、習慣などについて紹介して頂いた。私達も外国籍住民の方々に日本文化を理解してもらえるように日本文化について紹介した。聞く側である地域住民は、初めて知る文化に驚きながら、質問をしたり、実際に体験したりしながら異文化理解に努めていた。

- ・料理教室（ペルー）

ペルー人の講師を招き、参加者を班に分けて、班ごとにペルー料理を作った。日本では見たことのない作り方や料理、味に多くの参加者が驚いていた。実際に外国籍住民と日本人住民とが料理を共に作ることで、相談したり教え合ったりしながら交流することができた。力を合わせて作ったペルー料理は、ピリ辛で非常に美味しかった。

- ・ワンコインツアーへの参加

大洗観光協会が主催する「ワンコインツアー」というイベントに、大洗おしゃべり広場として地域住民の方々と茨城大学の留学生と共に参加した。「ワンコインツアー」とは、500円で大洗町のグルメを楽しむツアーのことである。書写体験やカルメ焼き体験など留学生や外国籍住民の方には初めての体験が多く、難しいと言いながらも楽しく日本文化を体験していた。他にも大洗町の特産品などを食べ歩き、お腹も心も大満足だった。普段おしゃべり広場に参加して下さる地域住民の方以外に、商店街の方も巻き込んだ異文化交流活動ができた。

- ・ポットラックパーティー

1人1品料理やお菓子を持ち寄り、ポットラックパーティーを開催した。地域住民の方を中心に国際色豊かな様々な料理やお菓子が集まった。パーティーでは、料理やお菓子を食べながら自由に交流を楽しんだ。作り方を教わる人、一生懸命食べる人、珍しい料理の数々を写真に収める人、お互いの料理を食べながら感想を言い合う人など参加者それぞれが思い思いに楽しんでいた。外国につながりのある子供達も大勢参加し、学生達に母国語を教えて交流しており、非常ににぎやかなパ

ーティーだった。



「ポットラックパーティーの様子」

・七夕パーティー

参加者全員で七夕を楽しもうと思い、七夕パーティーを開催した。各国の七夕文化を比較し、学生で作った七夕料理（きゅうりやハム、星型のチーズなどを飾ったそうめん）をふるまった。全員で短冊に願い事を書き、飾りを作って、綺麗な笹飾りを作った。短冊には様々な言語で願いが書かれてあり、国際色豊かな笹飾りが完成した。外国籍住民の方々に日本文化を体験してもらう良い機会となった。

・イベントへのブース出展（八朔祭、盆踊りの夕べ）

おしゃべり広場の周知活動の一環として、

大洗で開催されたイベントに参加した。おしゃべり広場の宣伝をしつつ、イベントを楽しみ大洗について理解を深めることができた。

・異文化かるた

日本の遊びであるかるたを通して、外国人住民に、楽しみながら日本語・日本文化を学んでもらおうと、学生が企画し、制作した。12月のおしゃべり広場で【日本文化かるた】遊びを実施したところ、大好評だったため、2月の活動に向けて、さらに【大洗オリジナルかるた】を作成することが決定した。役場の協力を得て、町民にも読み札・絵札の募集を募るに至った（役場に応募箱の設置、町内回覧板、町内中学校への広報）。50の応募のなかから選定した30のかるたを2月の活動において実際に使用した。選んだかるたの製作者を、おしゃべり広場に招待したので、参加者がさらに増えるきっかけにもなった。国籍年齢男女問わず楽しめる企画になった。大洗おしゃべり広場のみならず、他の国際交流の場や日本語教育においてこの異文化かるたは活用できると考える。2013年度大洗おしゃべり広場の活動は幕を閉じたが、現在も金本ゼミの学生が、かるたの改訂と新バージョンの作成に当たっている。

例：

1グループ5，6人で行い、各グループに学生がひとりつき読み札を読む。

誰かが絵札を獲得したら、学生はもう一度読み札を読み、その日本文化についてわかりやすく説明する。説明が終わったら、次の読み札を読み始める。

のらボーイ&のらガールの食農教育プロジェクト — No Food, 農 Life —

教育・研究

課外活動

ボランティア

地域交流

代表者：農学部地域環境科学科 3年 大野莉沙

連携先

阿見町役場、JA茨城かすみ、阿見小学校、実穀小学校、吉原小学校、本郷小学校、君原小学校、舟島小学校、阿見第一小学校、阿見第二小学校

顧問教員

小松崎 将一（農学部 教授）

参加者

川又 康史（農学部地域環境科学科4年）
武石 直哉（農学部生物生産科学科3年）
八塚 拓（農学部生物生産科学科3年）
若井 誠幸（農学部生物生産科学科3年）
小川 佳祐（農学部資源生物科学科3年）
小山 修平（農学部資源生物科学科3年）
栗原 拓海（農学部資源生物科学科3年）
酒井 健伍（農学部資源生物科学科3年）
高梨 香苗（農学部資源生物科学科3年）
鳥井 隆史（農学部資源生物科学科3年）
平野 明則（農学部資源生物科学科3年）
山口 優衣（農学部資源生物科学科3年）
大須賀 麻希（農学部地域環境科学科3年）
大野 莉沙（農学部地域環境科学科3年）
片寄 彩美（農学部地域環境科学科3年）
神田 瑞穂（農学部地域環境科学科3年）
栗原 朱菜（農学部地域環境科学科3年）
杉本 麻美（農学部地域環境科学科3年）
藤岡 みのり（農学部地域環境科学科3年）
星野 佑太（農学部地域環境科学科3年）
松本 瑛実香（農学部地域環境科学科3年）

三輪 大樹（農学部地域環境科学科3年）
山崎 恵理（農学部生物生産科学科2年）
中根 麻冴美（農学部資源生物科学科2年）
野中 玲奈（農学部資源生物科学科2年）
福木 葵（農学部資源生物科学科2年）
勝村 遥（農学部地域環境科学科2年）
木納 勇佑（農学部地域環境科学科2年）
篠田 優香（農学部地域環境科学科2年）
島村 宗義（農学部地域環境科学科2年）
戸野 あすか（農学部地域環境科学科2年）
新妻 拳介（農学部地域環境科学科2年）
東 麻依（農学部地域環境科学科2年）
吉田 健人（農学部地域環境科学科2年）
和賀 智紀（農学部地域環境科学科2年）
高山 健（農学部地域環境科学科1年）
中津 祐也（農学部地域環境科学科1年）
生田目 慶都（農学部地域環境科学科1年）
曲山 康平（農学部地域環境科学科1年）

プロジェクトの申請内容

(1) プロジェクトの概要

阿見町において地域連携のもとに学生の視点から3つの食農教育を行う。

- ①遊休農地を阿見町の小学生と保育園生のために整備、並びに管理を行い、農業体験とともに食農教育を行う。これにより、使用していない土地の有効活用と地域活性化につなげる取り組みを実施する。
- ②JA茨城かすみと提携し規格外野菜・野菜の売れ残りの現状を調査、買い取りを行い、加

工して付加価値をつけた商品開発を行う。農業生産現場では、圃場生産量の約20%が規格外野菜として圃場廃棄される。これらの有効活用により農業の再生を図る。

- ③ J A茨城かすみと阿見町の小学校が連携した学校農園を活用した食農教育活動において、農園管理のスタッフとしてボランティア活動を行う。

(2) 内容・計画

- ①遊休農地を活用した食育の新展開：阿見町の遊休農地を整備し、小学生と保育園生と農業体験のために農地の準備や企画を行う。小学生と保育園生は保護者の方と一緒に定期的に参加してもらう。育てる作物は蕎麦で、11月下旬に親子で蕎麦打ちを体験してもらう。
- ②規格外、売れ残り野菜の有効活用による農業再生：買い取りが可能な作物を購入し、その作物を活かした加工品をつくる。また、小学生にもこれらの野菜の存在や、その現状も知ってもらう食農教育を行う。商品化がうまくいけば、農学部の鋤耕祭、青空市（阿見の物産展）や J A茨城かすみでの販売を予定している。
- ③学校農園での学生ボランティアの推進：農業体験活動を行う農家の負担減少や J A職員削減の問題の解決を図るため、阿見町の J Aや小学校と連携し、学生ボランティアとして学校農園の円滑な運営と学生の視点から子供たちにフィールドを活かした効果的な食農教育を実施するための補助を行う。

(3) 期待される成果

- ・阿見町に存在する遊休農地の有効的な活用
- ・規格外・売れ残り野菜の加工による有効的な活用と新たな付加価値の創造と提案
- ・農学部生の視点から、学生の持つ機動力を活

用したユニークな地域食育活動の発展に貢献

- ・小学生の農業に対する興味を持つきっかけの創造
- ・年齢層の違う人々の触れ合いの場の創出

プロジェクトの実施概要

①遊休農地を利用した食農教育

月	内容
6～7月	遊休農地開墾
8月24日	そば播種イベント
9月14日	土寄せ
10月27日	収穫イベント
11月23日	脱穀
12月17日	製粉
12月20日	そば打ちイベント



②廃棄野菜の有効活用

月	内容
6～7月	JA・町役場との話し合い
6～10月	余剰野菜活用案の検討
11月	鋤耕祭で販売
12月	今後の検討



「鋤耕祭」

① 学校農園管理ボランティア

月	内容
6月	落花生マルチはがし・土寄せ
7・8月	落花生土寄せ、ゴーヤ収穫
9月	落花生・ヤーコン土寄せ
10月	落花生収穫・ポッチ作り
11月	落花生脱粒・煎り
12月	ヤーコン収穫



「落花生収穫の授業」

プロジェクトの成果報告

私たちの団体は、阿見町の方々との交流を大切にしながら“食”と“農”への興味、関心を広げ、阿見町の農業を活性化するために、以下の3つの活動を行った。

① 遊休農地を利用した食農教育

○目的

阿見町認定農業者と連携した遊休農地の開墾をし、小学生とその保護者を対象にそばの種まきからそば打ちまでの過程を体験して“食と農”に興味、関心を持ってもらう。

○内容

阿見町内の親子を対象に体験型のそば栽培を企画、運営した。

○成果

阿見町内の遊休農地約1haを開墾し、そば栽培に利用。自治体、地元農家と連携しながら活動を展開することができた。

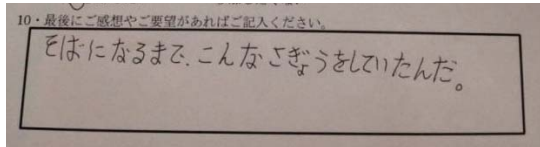
また、参加者の食と農に対する意識の向上がみられた。新聞（茨城新聞、日本農業新聞）に取り上げられ、活動を多くの人に周知することができた。



「日本農業新聞で掲載された記事」

○外部評価（参加者へのアンケートから）

- ・苦勞して作ったから残さず食べようと思った。
- ・そばをこねて丸める作業が楽しかった。
- ・1から作物をつくることの大変さ、楽しさを学んだ。
- ・以前に比べ農業に対する関心が高まった。
- ・子どもの希望で自宅の庭に畑を作った。
- ・そばだけでなくトマトなどの野菜や米の栽培を試みたい。



アンケートからも、食や農に興味、関心を持ってくれたことがわかる。

○今後の展望

広報活動とイベントに向けての準備を徹底し、日程を早めに設定する。耕耘機などの技術・知識を持っている人が少なかったため、知識を共有し、各自積極的に活動に参加する。遊休農地の開墾した土地で、そばだけではなく、他の野菜も栽培していく。



「遊休農地開墾前の様子」



「開墾の様子」



「そばの種まき」



「そばの収穫」



「昔ながらの脱穀機で脱穀」



「そば打ち体験の様子」

②廃棄野菜を加工した商品開発

○目的

規格外・余剰野菜を有効活用する。

○内容

農業生産現場では総生産量の約20%が商品価値の低い規格外野菜とみなされる。これら廃棄野菜を加工・商品化する。

○成果

小学校農園の廃棄予定の落花生を加工して秋耕祭で販売することができた。また、パネルを設置し、来場者に活動内容をPRすることができた。



「鋤耕祭 パネルで活動紹介、PR」



「落花生のつかみ取りの様子」(左)



「鋤耕祭での販売したピーナッツクリームパン」(右)

○外部評価（連携先からの意見、鋤耕祭でのアンケートから）

廃棄野菜の活用よりも阿見町の特産品づくりの方が、地域活性につながるのではとのご意見をいただいた。また、加工食品の種類を工夫することによって、売れる商品づくりをする必要があるとの指摘を受けた。

規格外野菜は、安価で販売されているものは「買いたい」との意見が多かった。

○今後の展望

計画、クリアすべき問題の予測が足りなかった。法的問題、商品製造に必要な場所、管理者、保健所の検査のような問題に柔軟な対応ができなかったという反省を生かし、商品化よりも廃棄野菜の有効活用に重点を置く。廃棄・余剰野菜の現状を知る、伝える活動（鋤耕祭、阿見町での物産展などで）を行う。そして、農家とのコンタクトを綿密にとる。



「鋤耕祭での販売の様子」

③小学校農園の管理ボランティア

○目的

JA茨城かすみとともに円滑な食育事業を行う。

○内容

定期的に農園の除草作業等を行い、農園の環境が良好に保たれるよう活動した。また、収穫体験など食育授業への参加も積極的に行った。



「除草作業の様子」

○成果

小学生と大学生が交流できた。作物の生育が良くなり、収穫量が増えた。

農場の環境を良好に保ち、JA茨城かすみの食育事業の負担を軽減することができた。

日本農業新聞に活動が掲載された。



○外部評価（小学校教員へのアンケートから）

- ・ 農園を見に行く児童や報告する児童が増えた。
- ・ 食べ物の好き嫌いがなくなった。
- ・ 食べ物を大切にするようになった。
- ・ 大学生が食育活動を手伝っていることを知らなかった。
- ・ 農学部の専門性を活かした活動をしてほしい。
- ・ 保護者も交えた活動をしてほしい。

（JA茨城かすみHPより 食育事業担当者様から）

「茨大生の皆さん6ヶ月間本当にありがとう。辛い仕事にも弱音を吐かず、いつも明るく元気に頑張ってくれました。作物の成長期から収穫に至る事業のピーク時を応援いただき、おかげ様で行き届いた圃場管理を行う事ができました。御苦労さまでした。」

○今後の展望

積極的に関わりをもってくれる先生方が少なかつたため、先生方のプロジェクトの認知度を上げる。また、小学生との交流が少なかったので、活動日を指定して小学校に知らせるなどの工夫をして調整をし、小学生との作業の頻度を増やす。



「マルチはがし授業の様子」





「落花生の収穫授業の様子」



「ポッチ作り授業の様子」



「給食に使用するヤーコン収穫の様子」

＜全体を通してのまとめ＞

○活動報告

小美玉市で実施された「いばらきオーガニックフェスタ」でポスターセッションへの参加。活動報告、PRを行い、農業生産者の方々や食・農に関心のある来場者と交流することができた。



「オーガニックフェスタでの様子」

○成果

関わりを持った方々の食、農の興味・関心を広めることができた。阿見町をより知るきっかけや、農業体験の機会、交流の場を提供することができた。

農学部としての専門性を深めることができた。充実感を得ることができた。

○今後の展望

遊休農地を利用した食農教育、廃棄野菜を加工した商品開発、小学校農園の管理ボランティアの3つのプロジェクトを融合させた食農教育を展開してゆく。

今年度作った地域とのつながりを大切に生かし、ネットワークをさらに広げていく。

ビブリオバトル in 常陸太田実行委員会

地域貢献

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科4年 芦田 真子

連携先

常磐大学（長谷川幸一教授、岩本東子、坂本和信）

常陸太田市役所、常陸太田市立図書館

顧問教員

谷口 基（人文 准教授）

参加者

赤津 圭子（人文学部社会科学科4年）

芦田 真子（人文学部人文コミュニケーション学科4年）

飯塚 大空（人文学部人文コミュニケーション学科3年）

田嶋 直樹（人文学部人文コミュニケーション学科3年）

プロジェクトの申請内容

●プロジェクトの概要

「知的書評合戦ビブリオバトル」とは、オスメの本をひとり1冊持ち寄って5分間でその魅力を語り、集まったバトルー全員が発表後、観覧者も含めた全員で「一番読みたくなった本」に投票を行ない、最多票獲得本がチャンプ本になる、というゲーム感覚の書評会である。ビブリオバトルは2007年から始まり、現在全国に普及し、各地で開催されている。茨城でも水戸市内では茨城県立図書館等で、つくば市内では筑波大学等でビブリオバトルのイベントが開催されていた。常陸太田市内は「図書館まつり」等

のイベントは積極的に行なわれていたが、ビブリオバトル未開催の地域である。ビブリオバトルの魅力として、開催も参加も非常に簡単であり、シンプルなルールであるためどの年代でも親しむことができる点がある。

常陸太田市で複数回ビブリオバトルを開催し、最終的には11月に市民の集いやすい常陸太田市立図書館で開催することによって、人と人との出会いの場を創造し、新しい本との出会い方を広めることを目指す。

●目的

常陸太田市内でのビブリオバトルの普及、並びに読書推進、地域交流

●本年度の目標

本プロジェクトはビブリオバトルを理解している本学の学生と常磐大学の学生2名が連携し、学生主体で運営する。常陸太田市民をターゲットに開催するため、以下のことを目標にする。

- ・常陸太田市民のコミュニケーションのきっかけの創造
- ・ビブリオバトルの普及

月1のペースでビブリオバトルを開催することによって、コミュニケーションのきっかけを作り、継続によってイベントを発展させていく。

そして11月に常陸太田市立図書館で行なう本大会に向けて、鯨ヶ丘商店街や朝日新聞に協力を仰ぎ、図書館以外の場所でもビブリオバト

ルを開催する。市内各所や学校にも企画広報を行ない、広く市民の参加を募る。

●期待される効果

ビブリオバトルのコンセプトは「人を通して本を知る、本を通して人を知る」である。読書とは基本的に個人的なものであるが、ビブリオバトルの場合は「本」や「読書」をキーワードに人が集うことになるため、様々なかたちの出会いを創造することが可能になる。地域に根差している図書館で主に開催する今回は特に下記の2点の効果が期待される。

①地域交流（地域住民の交流の場の形成、世代間交流の推進）

ビブリオバトルのイベントをきっかけに市民が集い、交流が生まれる。さらに本との出会いを通して市民同士の魅力を発見することができる。

②読書推進(常陸太田市立図書館の利用率向上、ビブリオバトルの認知)

本の魅力を人が実際に語ることによって、読書への新たな興味を育むことができる。さらにはビブリオバトルという「新しい本との出会い方」を知ってもらうことができ、読書の違う楽しみ方を体感してもらえる。

プロジェクトの実施概要

月	内容
5月	・チーム発足
6月	・常陸太田市役所と常陸太田市立図書館との打ち合わせ
7月	・広報開始(Twitter、Blog開設) ・第1回ビブリオバトルin常陸太

	田開催(@常陸太田市立図書館)
8月	・常陸太田市役所の方と7月のイベントを振り返る。今後の活動検討。 ・第2回ビブリオバトルin常陸太田開催(@生涯学習センター)
9月	・第3回ビブリオバトルin常陸太田開催(@常陸太田市立図書館)
10月	・第4回ビブリオバトルin常陸太田開催(@生涯学習センター) ・ビブリオバトルin東海村共催(@東海村立図書館)
11月	・第5回ビブリオバトルin常陸太田開催(@常陸太田市立図書館)



プロジェクトの成果報告

●今年度得られた成果

◇行政との協力関係の確立

常陸太田市での活動の展開において、行政との連携が不可欠であると判断した当チームは、プロジェクトの初期の段階から常陸太田市役所、常陸太田市立図書館とミーティングを複数回行い、イベントの企画・開催全体のことや施設を借りる日程など、プロジェクトの円滑な運営のために行政と協力して話し合いを進めた。また広報においても、毎回ビブリオバトル開催の際にはチームで作成したポスターを、常陸太田市役所や常陸太田市立図書館をはじめ市内各地に掲示していただいたり、常陸太田市の広報誌にプロジェクトの活動の記事を掲載していただいたりするなど、行政から多大な協力を得てよりプロジェクトの存在を広めることが出来た。



↑プロジェクトの活動が紹介された『広報むたちおた』誌



↑常陸太田市の街中に掲示されたポスター

◇常陸太田市内でのビブリオバトルの普及

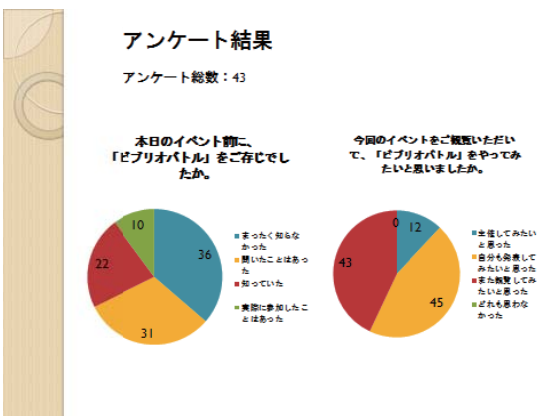
茨城県内でビブリオバトルが未開催であった地域（水戸市やつくば市では開催されていた）である常陸太田市で、当チームは7月～11月に毎月1回ずつ、計5回ビブリオバトルを開催した。その結果、常陸太田市民の方がポスターやチラシを観て、15、6人から多い時で30人近くの参加者が集まり、中には複数回参加するリピーターもいた。また、バトルで常陸太田にゆかりのある本を紹介する方も見られるなど、開催の回数を重ねていく毎に地域性が織り交ざった独特のイベント形成に至り、常陸太田市でビブリオバトルが多くの人に認知された。



↑ 7月に常陸太田市立図書館で開催したビブリオバトルの様子



↑ 11月に常陸太田市立図書館で開催したビブリオバトルの様子



↑ イベント時に毎回集計したアンケート結果

◇ビブリオバトルの輪の広がり

常陸太田市におけるビブリオバトルの普及・促進を目的として活動してきた当チームにとって思わぬ成果であったのは、常陸太田でのビブ

リオバトルに参加した人が、東海村でのビブリオバトルの開催を打診してきたことだった。東海村青年会に所属するその方から東海村立図書館でビブリオバトルを開催したいという相談を受けた当チームは、共催という形で10月末に東海村でのビブリオバトルに参加した。常陸太田でのビブリオバトルの活動がきっかけとなって、常陸太田市内だけではなく、茨城県内の他の場所でのビブリオバトルの普及が出来たことは、当初の想定以上の成果といえるだろう。

知的書評合戦
ビブリオバトル
in 東海村

本を読む楽しさを
みんなで共有しませんか？

日時 平成25年 **10月27日**(日)
第1部 14:00~15:10
第2部 15:10~16:20

場所 **東海村立図書館**
交流ラウンジ

What's
ビブリオバトル

- 紹介したい本を1冊持つくる
- 5分間で発表/質疑応答
- 観覧者は、「一番読みたい！」と思った本に投票
- チャンプが決定

発表者(ホラー)として参加したい!

⇒事前申込みが必要です
図書館(窓口/電話/メールのどれか)にて
お申込みください。
※発表者は、高校生以上が対象です
※メールの方は、①名前 ②性別 ③年齢 を明記の上、ご応募ください。
※10月1日(火)~8日(火)は、観覧点検のため休館です。この期間の応募受付はメールのみとなりますのでご了承ください。

申込み締切り **10月18日(金)**

観覧者として参加したい!

⇒事前申込みは不要です。
当日、お気軽にご来場ください。

【問い合わせ・申込み先】
東海村立図書館
〒319-1115 茨城県那珂郡東海村船場 768
電話 029(282)3435
E-mail info@tonoyo.vill.tokai.ibaraki.jp
HP <http://tonoyo.vill.tokai.ibaraki.jp>

主催 読書会@東海村
共催 東海村立図書館/東海村の環境課/東海村 in 常陸太田実行委員会/東海村青年会

↑ 東海村でのビブリオバトルのポスター

●外部評価

ビブリオバトルin常陸太田の活動に関しては、下記のメディアに広報や活動の様子を掲載していただいた。

- ・ビブリオバトル公式ウェブサイトニュース (7月10日)
- ・常陸太田市facebook掲載

(7月28日、9月22日、10月4日、10月19日、11月5日、11月19日)

- ・広報ひたちおた
平成25年度9月号、11月号掲載
- ・茨城朝日9月11日5面
- ・よみうりタウンニュース9月12日8面
- ・読書会@東海村HP(10月18日)
- ・東海村図書館HP(ビブリオバトルin東海村、「報告 読書週間イベントを開催しました」)
- ・生涯学習情報誌「フォonz」No.69掲載

●目標達成度合

- ・常陸太田市民のコミュニケーションのきっかけの創造

ビブリオバトルの参加者アンケートより、「若い方と本を通じて心を通わすことが出来てやっぱり本は人と人とを結び付ける大きな存在」「日常生活の中だけでは出会わなかっただろう本に出会える良い機会。本を通して紹介者の一面も見ることができておもしろかった」「全然知らない人同士で行うのも良いが、友だちや知り合いの中で行っても意外な一面を知ることができそうのでぜひやってみたい」といった感想をいただいた。読書に対しての前向きな意見や本を通しての交流がよかったという声が多数寄せられた。さらには常陸太田市外からの参加者もあり、地域交流やコミュニケーションのきっかけ創造に貢献できたと思われる。

反省としては、常陸太田市立図書館を中心にビブリオバトルを開催することとなったため、鯨が丘商店街で開催するには至らなかったことである。また、朝日新聞や市内の学校への広報は十分な計画が立てられず時間がとれなかったため、効果は得られなかった。

- ・ビブリオバトルの普及
アンケートより、イベント前にビブリオバト

ルを知らなかった人、やったことのなかった人は全体の90%であったが、実際に参加した後、また参加したいと思った人が100%であり、中でも実際に主催してみたい、または発表してみたいという人が全体の約50%と、ビブリオバトルに好意的な印象を持ってもらうことができた。ビブリオバトルin東海村の共催等、活動の広がりもみられ、普及活動の成果があったと思われる。

●今後の展望

本プロジェクトは、今年度初めて活動を開始し、多くの出会いを経験することができた。

ビブリオバトルの普及という点では、常陸太田市の広報誌に掲載させていただけたことにより、市内に住む方々に広く、ビブリオバトルを知るきっかけ作りができた。また、地域連携という点では、常陸太田市役所や常陸太田市立図書館、鯨が丘商店街の商店(カフェ結+1)、読書会@東海村、東海村の環境調べ隊、東海村立図書館等様々な機関・団体との連携を取ることができ、新たな普及対象や連携方法の可能性を感じることができた。

今後は、連携・普及地域の拡大を目指し、また、小中高生・大学生等の若い世代の参加者を増やすことで、ビブリオバトルのさらなる普及を目指したい。

歌う！繋がる！響きあう！ ～水戸芸術館との協働による音楽文化の振興と発信～

教育・研究

地域交流

課外活動

代表者：教育学部音楽選修 4年 角田 葵

連携先

水戸芸術館、常磐大学、水戸第一高等学校、
水戸第二高等学校、茨城高等学校、大成女子
高校、水戸ジュニアオーケストラ、MLR.

顧問教員

守山光三（教育学部 特任教授）

参加者

渡邊 興司（教育学研究科音楽教育専修2年）
日下部健太（教育学研究科音楽教育専修1年）
内野 健太（教育学部音楽選修4年）
柏 早紀（教育学部音楽選修4年）
高野 佑美（教育学部音楽選修2年）
磯崎 彩佳（教育学部音楽選修2年）

プロジェクトの申請内容

●プロジェクトの目的

水戸近郊には、水戸芸術館（以下芸術館）を始めとする20以上の文化施設が存在し、多様な団体がそれらの施設で盛んに活動を行なっている。特に音楽系団体に関しては、水戸市を拠点に活動する団体だけでも約50存在する。しかしそれぞれが独立して活動しているため、相互に具体的な実態がわからず、地域を巻き込んだ活動が目立たない。

本プロジェクトでは、茨城大学の学生を中心に、芸術館が主催できるよう協働をとりながら、大学・高校・世代・ジャンルといった垣根を超える「ボーダーレス」をキーワードに、音楽を通じた地域・文化振興を行うことを目的とする。

なお、芸術館はそのホールの貸与を一切行っていないため、本プロジェクトに対して、芸術館の主催事業として取り組む予定である。

●プロジェクトの内容

芸術館との連携を取りながら、本プロジェクトが主体となり、社会に発信する音楽祭を1月中旬に開催する。具体的には茨城で活動している学生音楽系団体を中心とすることにより、子供からお年寄りまで楽しむことのできる多種多様かつ独創性のある音楽を取り扱った音楽祭を企画・運営する。またそのために、企画・運営する上での必要な手立てについて外部講師を招き企画を監修・指導していただく。今年度は実現の可能性から、4音楽系団体を中心に約60人で活動を行う。

●プロジェクトの効果

本プロジェクトにおいて、本学の学生が中心となり、地域の音楽文化の交流に興味を持つ様々な専門家に加わっていただくことにより、参加者同士の学び合いが必然的に生じ、それぞれの独立した知識を普遍的・持続的なものへと昇華し、地域へ反映することができる。さらに参加者が地域の人材や伝統、風土が持つ音楽的な教育資源の再確認をすることで、積極的に教育活動に参画し、郷土愛を育むきっかけとなる。高校生にとっては、企画に携わることで社会に近づくことのできる機会を得ることができ、キャリア教育としての側面からも貴重な経験となることが考えられる。

昨年度1月に、学内において自主的に本プロジェクトの前身となる企画を実施したところ、多くの地域住民の方に感心をいただき、更に地域に開けたイベントを望む声が寄せられた。こういった活動により、更なる地域や年齢を超えた連携が生まれると予想できる。

プロジェクトの実施概要

地域連携 奏でる！繋がる！響きあう！

水戸学生音楽祭

水戸第一高等学校 (本管アンサンブル他)
水戸第二高等学校 コーラス部
茨城高等学校
大成女子高等学校 (本管アンサンブル他)
常磐大学 (本管アンサンブル)
水戸ジュニアオーケストラ (金管アンサンブル)
MLR (弦楽アンサンブル)
特別出演 瀧本真己 (水戸二高コーラス部OG) (ソプラノ独唱)
杉田茉奈美 (ピアノ伴奏)

2014.1.25 土
15:00 開場
15:30 開演

水戸芸術館
コンサートホールATM
入場無料

本公演は茨城大学社会連携事業会の主催事業として、茨城大学の学生が企画・運営する事業会です。そして、本公演収益の一部が、その活動に充てられます。出演は、水戸を中心に活動する学生達による音楽団体。本公演は、地域の音楽文化の「種」の発芽のため、大学、高校、年代、ジャンルという枠組みを超えて、これらの団体が協賛し、交流・連携していくための場となることを目指しています。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

【お問い合わせ】
水戸芸術館音楽部門 TEL:029-227-8118
公演の内容等は、変更になる場合があります。
*4歳未満の入場はご遠慮ください。 水戸芸術館
〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL:029-227-8111 <http://artowemto.or.jp>

茨城大学 社会連携事業会 支援事業
水戸芸術館 アートマネージメント人材育成・大学連携プロジェクト
主催 茨城大学 学術推進委員会
公益財団法人水戸市芸術振興財団

「演奏会のポスター」

平成26年1月25日、水戸芸術館コンサートホールATMにてコンサートを実施した。

プロジェクトの成果報告

水戸芸術館と茨城大学の交流は今までなかった。そんな中、文化庁による「大学を活用した文化芸術推進事業」の告示がきっかけとなり、水戸芸術館と茨城大学の連携が始まった。水戸芸術館において貸しホールは行なっておらず、本プロジェクトと水戸芸術館が協働で企画・主催を行う形となった。具体的には、プロジェク

トメンバーが、水戸芸術館から「アートマネージメント」についての理念を学び、学生主体で企画を考えるという形になった。



「水戸芸術館と茨大生による会議の様子」

演奏会の目的として、プロジェクトの大本のテーマである地域連携に設定した。当初は実現可能な規模を考え、常磐大学・水戸第二高等学校・水戸第三高等学校に絞ったが、プロジェクトを進めていく中で企画の実現性、地域連携性を高めるために、水戸第一高等学校吹奏楽部・水戸第二高等学校コーラス部・茨城高等学校吹奏楽部・大成女子高等学校吹奏楽部の学校機関に加え、水戸第二高等学校コーラス部OGの“MLR”、地域の青少年を集めた水戸ジュニアオーケストラ、水戸出身のセミプロの歌手瀧本真己さん、ピアニストの杉田茉奈美さんを招き、幅広いジャンルをカバーした企画となった。水戸芸術館での演奏ができること、そして今までになかった地域連携の企画性から、多くの団体が快諾してくださった。



「瀧本さん・杉田さんの演奏の様子」

また私達の想いを活かした企画運営を行えるよう、音楽家のアドバイスを多く受けた。想いを持った演奏会を実現させるための様々な手法を本演奏会に反映できた。

各学校が様々な行事を抱える中での企画への参加であったが、地域連携という企画の趣旨を全団体が理解してくださり、合同による「ふるさと」の演奏を実現することができた。出演者133人、入場者数252人の歌や演奏が合わさり、総勢385人が繋がったといえる演奏となった。



「出演者133人合同演奏の様子」



「運営の仕事をするスタッフの様子」

来場者のアンケートから、「このような地域連携を目的とした企画は今までになく今後にも期待したい。」という意見、演奏者の感想から、「最後に行った〈ふるさと〉の合同演奏において、出演者の演奏と入場者の歌が合わさり、全員が繋がれたことに感動した」という声や、「普段の高校生は演奏することのみに専念しているが、今回コンサートの演奏会の運営に携われたことは貴重な体験だった」という意見もあった。加えて、「演奏会だけではなくさらに交流が深められるような企画にも期待したい」との要望もあった。このことから、本企画が地域連携の一つの形になったと考えられる。

大洗応援隊！ ～情報発信基地&人と人をつなぐ場所「ほげほげカフェ」～

ボランティア

地域交流

代表者：教育学部学校教育教員養成課程特別支援教育コース 3年 小野寺 藍

連携先

大洗町役場、髭釜商店街、大貫商店街、
永町商店街、曲がり松商店街、
まいわい市場、大洗町漁業研究会、
大洗町宿舍青年会

顧問教員

伊藤 哲 司

プロジェクト参加者

齊田 菜穂 (人文学部 4年)
塚田 千尋 (人文学部 4年)
小野寺 藍 (教育学部 3年)
柴田 裕輝 (理学部 3年)
白土可奈子 (人文学部 3年)
上野嘉那子 (人文学部 2年)
後藤 愛理 (人文学部 2年)
沢村 浩平 (理学部 2年)
根本 雄輝 (工学部 2年)
春里 桃子 (人文学部 2年)
比屋根利紀 (人文学部 2年)
加藤 成美 (人文学部 1年)
武田 佑穂 (人文学部 1年)
畠田慎太郎 (人文学部 1年)
原 貴大 (工学部 1年)
細萱 真希 (人文学部 1年)
本田 和之 (工学部 1年)
増山 潤 (人文学部 1年)
南 陽子 (人文学部 1年)
宮崎 泉 (人文学部 1年)
森 彩織 (人文学部 1年)
山本 大介 (人文学部 1年)

プロジェクトの申請内容

●プロジェクト概要

本プロジェクトは、大洗町・髭釜商店街と連携し、学生を中心に地域住民が集い情報交換や交流を行うにぎわいの拠点としてのカフェを運営することを中心とする。

「大洗応援隊!」とは、東日本大震災を受け大洗町の復興支援を行うことを目的に2011年5月に創設された組織である。大洗町での活動に関心を抱いて集まった学生や社会人によって構成され、大洗のさらなる復興をめざし、防災を含む町づくりの視点から独自の取り組みを行っている。2012年9月より髭釜商店街の空き店舗を活用した集いの場「ほげほげカフェ」を運営、さらに2013年3月より「みんなの声聞き隊」を結成し、町の産業に携わる方や住民を訪問し町の声を集める活動を行ってきた。

今年度は、これら2つの活動を通して見えてきた町のニーズを踏まえカフェの運営・機能を見直し、情報発信と地域住民の交流の場を増やすことに重点を置き、地域交流の拡充をめざして本プロジェクトを行っていくものとする。

●目的

大洗町の地域交流の拡充及び商店街の情報発信

●本年度の目標

◇地域住民の交流の場

地域住民がカフェに入りやすいような雰囲気作り、カフェに来るきっかけになるようなイベントを企画する。それにより、ほげほげカフェが地域住民の集いの場・情報交換の場になることを目指す。

◇商店街の情報発信

商店街の魅力を紹介できるようなマップを製作する。そのマップにより大洗町内外の人が商店街を訪れるようになり、商店街が活性化することを旨す。

●期待される効果

◇地域住民の交流の場

地域住民が情報を共有する場・顔の見える関係を築く場となるだけでなく、住民自身が地域の魅力を発見・再認できる場所になる。それによって、住民同士・町そのものに対する関心を高め地域の活動をより活性化させることができ、日常防災にもつながる。

◇商店街の情報発信

商店街の情報を発信することで、大洗町内外に商店街の魅力をアピールする。商店街の魅力を学生独自の視点から発信することにより、観光客が商店街に興味を持つようになる。

◇学生の影響

また、学生が地域の取り組みに参入することで、町の賑わいの増加が期待できる。学生自身も地域の活動に関心を持ち、広い視野を獲得することができる。



「応援隊メンバー集合！」

プロジェクトの実施概要

<「ほげほげカフェ」運営>

～1月	毎週土曜日
-----	-------

<その他>

6月	大洗商店街マップ情報収集開始
7月	Twitterによる広告開始
8月	大洗商店街マップ（仮）完成
9月	大洗商店街マップの原案図完成、確認作業開始
11月	ルービックキューブ講座（ルービックキューブ協会さんと共催）
	あんこう祭り&ポスターディスカッション展示
	大洗商店街マップ確認作業完了
12月	商店街マップのデザイン再構築
1月	ほげほげマップ最終版完成
	カフェ内にほげほげマップの設置
	商店街の店舗へのマップ配布開始

プロジェクトの成果報告

●今年度得られた成果

◇ほげほげカフェ

<目標の変更>

「ほげほげカフェ」は、プロジェクト概要の中でも述べた通り、髭釜商店街にある空き店舗

を活用して学生が運営しているカフェのことである。今年度は天候等の影響がない限り、毎週土曜日にカフェを運営することができた。しかし、運営を継続する中で、目標を変更する、方針を転換するなど色々なことがあった。

プロジェクト開始当初は、地域住民の集いの場となることを目標に活動していた。店先で声を掛けるなどの活動を行っていたが、カフェと同時進行で商店街マップの情報収集や商工会の方との話し合いを行っていたうちに、自分たちの目標と地域が求めるカフェの形が違っていることに気付いたのである。

というのも、情報収集を行っていると、商店街の方々はカフェに対し「地域住民の集いの場」ではなく「観光客の休憩所」となることを求めているのではないかと思えてきたのだ。応援隊の中で話し合いを重ね、地域が求めていることをやるべきだという結論に至り、カフェの運営方針を見直すこととなった。応援隊のネットワークを活かし社会人の方にも相談をしたが、「まずは地域が求めていることをやり、それを自分たちが目指す方向に繋げればいい」というアドバイスをもらい、運営方針を変更することに決めた。



「カフェ運営の様子」

＜観光客向けのカフェ＞

運営方針を転換してからは、観光客の休憩所となるようなカフェを目指して運営し、新たな

宣伝方法も取り入れた。Twitterを利用することで広範囲に情報を発信し、ポスターを掲示することでカフェの前を通った方々にもアピールした。また、大洗を舞台にしたアニメの盛り上がりも利用し、カフェ内にイラストなどを描くことができる掲示板も設置した。このように宣伝に力を入れた結果、カフェの知名度が上がり、訪れる方々が増え、休憩所として利用されるようになっていった。

その結果、カフェで休憩し、商店街の広範囲にお客さんが行くようになった。また、休憩所としてだけでなく、カフェを訪れたことがきっかけで友達が出来たという声もあり、交流の場としての機能も果たしている。



「カフェ運営の様子2」

◇商店街マップ

＜マップ完成までの道のり＞

大洗町にある4商店街101店舗の魅力をアピールするための商店街マップを作製した。1軒ずつ直接伺い、営業時間やアピールポイントなどを聞いて回った。長い時は1軒につき1時間掛かることもあったが、商店街の方々と色々な話をする中で応援隊について知ってもらうこともできた。

我々も商店街について色々を知ることができた。お店の基本的な情報だけでなく、歴史、特徴、そのお店に掛ける情熱など知ることができ、観光客からお店の場所やおすすめなどを聞かれ

るとすぐに答えられるようになった。



「商店街マップ 表」

＜完成後のマップ配布＞

マップが完成してからは、商店街に一部ずつ配るほか、観光客に配っている。マップについてもTwitterで宣伝したほか、マップを手にとった方が宣伝してくださり、マップの知名度が上がった。マップをもらうために遠方からカフェに来て下さる方や、マップを手に商店街を歩いている姿を見ることもあり、商店街の魅力を発信することができている。

今後は増刷やマップを活用したイベントなどを行い、作って終わりにならないようにする。



「髭釜商店街のイベントの様子」

●外部評価

＜外部評価の収集方法＞

- ・カフェの感想ノート
 - ・マップの情報収集の際の聞き取り
 - ・Twitter
 - ・Facebook
- 等

今年度は、昨年度の継続的な要素が大きかったこと、プレリリースなどの報道機関向けの広報を行わなかったこともあり、メディアからの取材はほとんどなかった。しかし、マップ作成における情報収集やイベント補助、継続的なカフェ運営を通して、商店街を中心とした住民の方や観光客の方の間での認知度は高まっている。

今後はプレリリースの作成などを行い、積極的に活動の告知、広報を行うとともに、アンケートや聞きまわりなど、ニーズをより把握するための取組を行いたい。

＜メディア取材＞

読売新聞 1月6日朝刊

＜住民の方からの声＞

「「ほげほげカフェ」が何をやっているのかわからない。そもそも自分たちがやりたいこと、意味とは何なのか。」このような言葉を受けて、運営の方針転換に踏み切った。

「学生たちがこうやって頑張っている。若い人たちが町に加わるだけでも、にぎやかになるね。自分たちも、頑張ろうと思えるよ。」

＜来店者からの声（感想ノートより）＞

「町内に、この様にお手軽な価格で休める所があるのは良いですね。頑張ってください。」

「ほげほげカフェのドリンクと店員さんの笑顔で身も心もあったか！！また来ます。」

「心がかかっていると、大洗に行きたくなるのです。いつも気さくにもてなしてくれてありがとうございます。」

●目標達成度合

目標	達成度	成果
カフェ運営	◎	基本的に毎週土曜日に運営することができた。カフェに関する情報発信も行い、多くの観光客に来てもらうことができた。
カフェでの講座開催	△	カフェに来るきっかけづくりとして、2か月に一回住民を講師にした講座を開催する予定だった。しかし、運営方針を転換してしまっただけのため、優先順位が下がり、ルービックキューブ講座一回のみになってしまった。
商店街マップの作製	○	プロジェクト開始当初の完成予定は9月だったが、実際に完成したのは1月だった。完成はしたもの、計画の見通しが甘かった。



「ボランティア活動報告会」



「講座の様子」

●今後の展望

今年度はカフェを継続して運営しながらも、twitterやfacebookを通して新たな繋がりを作ることが出来た。また、マップ作成を通して地域住民と交流ができ、充実した一年となった。今後、活動を続けていく上で、町民の方々との話し合いをさらに深めることが必要である。今までの活動を続けつつ、ニーズに応じて様々な活動にチャレンジし、グループ内のネットワークを活かして学生と地域で協力し、大洗の更なる活性化を目指す。



大子町における、地域活性化プロジェクト

教育・研究

課外活動

ボランティア

地域交流

代表者：理学部理学科 3年 相良 祐希

連携先

大子町教育委員会大子町役場
初原ぼっちの学校周辺の地域の方々

茂野 藍矢 (教育学部養護教諭養成課程
1年)

関根 望 (教育学部情報文化課程社会
文化コース 1年)

顧問教員

生越達 (教育学部・教授)

高木 和音 (教育学部学校教育教員養成課程学
校教育コース 言語・社会教育系
社会選修 1年)

参加者

阿部 巧 (教育学部学校教育教員養成課程
学校教育コース言語・社会教育
系社会選修 1年)

高山 健 (農学部地域環境科学科 1年)

新井 真夏 (人文学部人文コミュニケーション
学科 1年)

田口 真帆 (教育学部学校教育教員養成課程学
校教育コース言語・社会教育系国
語選修 1年)

飯田 夏望 (教育学部学校教育教員養成課程
学校教育コース言語・社会教育
系社会選修 1年)

辻 翔貴 (工学部都市システム工学科
1年)

伊坂 志帆 (人文学部社会科学科 1年)

寺尾 弘規 (工学部機械工学科 1年)

石井 努 (工学部知能システム工学科
1年)

仲澤 圭汰 (工学部機械工学科 1年)

大竹 夏未 (人文学部人文コミュニケーション
学科 1年)

中津 祐也 (農学部地域環境科学科 1年)

川井 涼汰 (工学部都市システム工学科
1年)

中村 勇太 (教育学部学校教育教員養成課程学
校教育コース技術教育系 1年)

川崎 麻貴 (教育学部情報文化課程アート文
化コース 1年)

生田目慶都 (農学部地域環境科学科 1年)

高地 麻紀 (人文学部人文コミュニケーション
学科 1年)

浜迫由紀子 (人文学部人文コミュニケーション
学科 1年)

斉藤 瞬 (工学部電気電子工学科 1年)

廣瀬 朝美 (教育学部養護教諭養成課程
1年)

三瓶 和也 (教育学部学校教育教員養成課程
学校教育コース言語・社会教育
系社会選修 1年)

曲山 康平 (農学部地域環境科学科 1年)

松本さおり (教育学部学校教育教員養成課程学
校教育コース 理数教育系 理科
選修 1年)

山川 尚子 (人文学部社会科学科 1年)

横田 千尋 (人文学部人文コミュニケーション
学科 1年)

熱田 佳苗 (教育学部学校教育教員養成課程学校教育コース言語・社会教育系社会選修 2年)

飯野 朋恵 (教育学部学校教育教員養成課程学校教育コース生活科学教育系家庭選修 2年)

飯村真理奈 (教育学部学校教育教員養成課程特別支援教育コース 2年)

郡司 琢磨 (人文学部社会科学科 2年)

佐々木 舞 (教育学部学校教育教員養成課程学校教育コース言語・社会教育系国語選修 2年)

塩谷 仁実 (理学部理学科数学・情報数理コース 2年)

若井田 萌 (教育学部学校教育教員養成課程学校教育コース生活科学教育系家庭選修 2年)

松崎 悠太 (教育学部学校教育教員養成課程学校教育コース言語・社会教育系社会選修 2年)

石橋江莉佳 (教育学部特別支援 3年)

稲葉 和哉 (理学部理学科数学・情報数理コース 3年)

江原 洋樹 (教育学部社会科 3年)

大島 慎司 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

小野崎崇仁 (理学部理学科数学・情報数理コース 3年)

相良 祐希 (理学部理学科数学・情報数理コース 3年)

須藤 惇士 (教育学部学校教育教員養成課程学校教育コース言語・社会教育系社会選修 3年)

谷川 響 (農学部地域環境科学科 3年)

藤岡みのり (農学部地域環境科学科 3年)

プロジェクトの申請内容

◆プロジェクトの概要

学生の「子どもを集めてキャンプがしたい！」という思いからチームが発足。平成25年現在28名の新入生が新たに加わり、総勢45名となる。大子町の廃校「初原ぼっちの学校」(以下ぼっちの学校)で、平成19～24年度にわたり子どもたちを募集して、キャンプを行った。計画が実現するまで支援して下さった学校関係者や地域の方々、大子町役場の方と関わる中で、キャンプを行うだけでなく大子町やぼっちの学校に貢献したいと考えるようになった。そこで近年では、ぼっちの学校で行うキャンプの他、秋季に行う学生と子どもとの交流企画(以下秋企画)を実施したり、地域の方々との交流をより一層深めたりすることで大子町の地域活性化を図っている。

◆期待される成果

△子どもを対象とした交流企画のなかで、普段の日常にはない「出会い」や「環境」に実際に触れることで子ども、また学生が成長するきっかけとなる。

△地域の方たちとの交流を重ねたり、企画の幅を広げ、大子町または当サークルの知名度を高めることで大子町の活性化につながる。

△地域の方たちと学生の交流だけでなく、地域の方たちどうしの交流(連携)が増えることで大子町の活性化につながる。

プロジェクトの実施概要

◆主な活動内容

【キャンプ】

2泊3日のキャンプを計画段階から、募集、企画、運営を全て学生が行う。

募集する子どもたちは主に、水戸・大子の子どもたちである。

大自然の中で遊んだり、子どもたちが仲良くなるような企画を行ったりする予定であり、計画するにあたり大子と水戸を始め子どもたちの地域を越えた交流や、地域の方々との関わりも視野に入れている。



【秋企画】

大子町の「放課後子ども教室」の子どもたちを招いて、公民館や保健センターにてレクリエーションやお菓子作りなどを行う。

企画は全て学生が考え、放課後子ども教室と連携して計画する。



【地域支援】

上記2つのイベントを行うにあたり、企画のリハーサルや実践を行うために、月一回程度ほどの学校を訪問。

その際準備だけでなく、学校の清掃や修繕などを行ったり、作物の栽培や花を植えるなどの活動を行う。

また積極的に役場や地域の方々を訪問し、キャンプ当日には子どもたちと地域の方々のお宅に行く。

その他、昨年度はお世話になっている地域の方々と一緒に学校の草刈りをしたり、稲刈りを手伝わせていただいたりし、地域との交流を一層深める。



プロジェクトの成果報告

◆今年度得られた成果

【キャンプ】

- ◇「さまーすくーるin大子」と称し、8月に2泊3日でキャンプを実施。
- ◇子どもから85通の応募があり前年度の72通を大きく上回った。
- ◇今年度から広報活動にも力を入れ、当日の活動中の内容やその時に撮影した写真をリアルタイムでSNSやHP (<http://kodofure.jimdo.com/>) で流すことによる、保護者の反響が大きかった。
- ◇キャンプ当日には参加者の保護者や、学校の先生、初原区長や役場の方、ぼっちの学校の卒業生が見学者として訪れた。



【秋企画】

- ◇「放課後子ども教室」との連携で行われる企画。今年度は12月に秋企画を実施し、2月での冬企画の計画を含め計2回行う。
- ◇秋企画では前年比45%増の応募人数、定員もそれに伴い増加させた。



【地域支援】

今年度は地域支援として

- ① 炭窯の修復
- ② 稲刈り
- ③ 地域との共同による学校の清掃活動
- ④ 薪わり
- ⑤ 畑の繁栄

以上5つの活動を実施。

薪わりで割った薪や、昨年度の稲刈りによってできた米はキャンプの企画に利用している。清掃活動や畑の繁栄については学校の景観をより良くすると同時に地域と連携をすることでお互いに関わりあうきっかけとしている。

このような地域支援の実施によって地域の方々からは「若手が不足している大子町にとって、このような活動をしてくれるのは非常に助かっている」といった評価をいただいた。

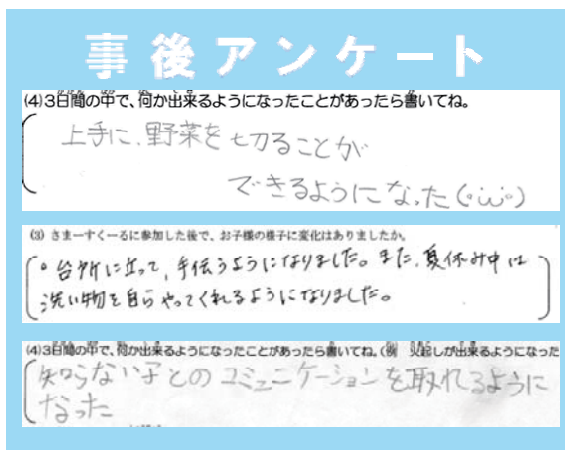




◆外部評価

◇キャンプ実施後、参加者とその保護者を対象にアンケートを実施。

「参加する前よりも自信がついているように見えました。」「大学生になったら子どもたちにキャンプをしてあげよう！と目標が持てました。」といった意見をいただいた。



◇初原区長から「地域と大学生との連携を大事にして地区の繁栄に繋げていきたい。」との意見をいただいた。

◇茨城大学広報誌「iUP (アイアップ) vol.4」
 (<http://www.ibaraki.ac.jp/common/pdf/generalinfo/iup04.pdf>) からの取材を受ける。

◆今後の展望

今年度は新たなつながりも増え、交流に深みを得ることができた。

しかし、新しくできたつながりを今年限りのものにしてはいけない。

大事なことは新しくできたつながりを継続する、また発展させていくことだと考える。

そして今年1年間の活動を通して、企画への応募者の大幅な増加が見られた。

しかしこれ以上参加者を増やすことは現状として厳しい。

この問題を解決するためにはより多くの人との交流が必要になってくると考える。

来年度は以上の二つを念頭に置いて日々の活動に取り組んでいきたいと思っている。

あかりアートプロジェクト

教育・研究

地域交流

ボランティア

代表者：教育学部情報文化課程 3年 鳥居 美伸

連携先

水戸市市長公室地域振興課

顧問教員

寺本輝正（教育学部美術教育教室 教授）

参加者

鳥居 美伸（教育学部 3年）
東ヶ崎麻未（教育学部 4年）
井川 太郎（教育学部 3年）
岡 実鈴（教育学部 3年）
小澤 栞莉（教育学部 3年）
重松 友美（教育学部 3年）
深栖 優希（教育学部 3年）
眞壁 悠久（教育学部 3年）
宮本麻衣子（教育学部 3年）
村山 恵美（教育学部 3年）
松田 美輝（教育学部 3年）
米倉 梨子（教育学部 3年）
渡邊 麻衣（教育学部 3年）
平田 亜美（教育学部 3年）

プロジェクトの申請内容

●プロジェクト概要

これまで、本学教育学部情報文化課程では、過去十数年にわたって機能性を重視した照明に芸術的側面を加えた「あかりアート」の研究・制作を積み重ねてきた。長年、「あかりアート」によって生み出される光や空間の変化を学び、街並づくりに活用できないかと考えた。そこで、水戸市の地域振興課と連携し、「あかりアート」の作品展示や実際に制作するワークショップを通して、「あかりアート」を身近に感じる機会を作る。

夜のイベントを盛り上げるあかりアート作品は、点灯した瞬間に「花が咲く」ような、そんな幻想的な美しさも感じられる。「あかりアートプロジェクト」は、「水戸の街がもっと好きになる」街づくりの提案をする。

●目的

「あかりアート」による

- ①イベントの企画
- ②まちづくりの活性化

●期待される成果

- ① 水戸市で行われるイベントに「あかりアート」の作品を展示し、非日常的な空間を作り出すことで、「あかりアート」が「いつもと違う街のかお」を創り、街が持つ魅力の再発見・再認識を地域住民に促す

ことにつながり、街全体の意識が高まる
ことが期待できる。また、全国レベルの
展覧会に出品した作品を展示することで、
イベントをさらに盛り上げることができる。

- ② 学生がサポートする西の内和紙を用いた
「あかりアートづくり教室」を開催する
ことで、地域住民に「あかりアート」の
制作を通して、「あかりアート」をより身
近に感じてもらうことができる。さらに、
そこで制作された作品を水戸市で行われ
るイベントで展示することも可能となり、
より積極的なイベントへの参加が望め、
地域の活性化が期待できる。

●連携の方法・内容

地域住民が身近に「あかりアート」に触れる
機会を作る。

- ① 水戸市で行われるイベントでの「あかり
アート」の展示
- ② 西ノ内和紙を用いた「あかりアート作り
教室」の開催

プロジェクトの実施概要

月	内容
6月	・あかりアート作品の研究制作(6月～10月まで 作品講評会全15回) ・山方町への西の内和紙の買い付け
7月	地域振興課との展示会議(12月まで毎月実施)
8月	美濃和紙の取り寄せ
9月	美濃和紙あかりアート展に向けての作品制作
10月	美濃和紙あかりアート展出展
11月	・水戸芸術館の下見・会議(全15回実施) ・あかりアート作り教室準備 ・イベント告知ポスター制作 ・山方町への西の内和紙の買い付け
12月	・イベント広報活動 ・「あかりアート作り教室in 茨城大学」の実施(12/8) ・あかりアート作品展示打ち合わせ(全10回実施) ・「あかりアート作品展示in 水戸芸術館」で2回実施(12/14・23)

プロジェクトの成果報告

①「第20回美濃和紙あかりアート展」への参加

日時：2013年10月12日（土）－13日（日）
場所：岐阜県美濃市うだつの上がる町並み
内容：全国から毎年多くの作品が集う大規模な展覧会（出展数446点）への作品出展および現地スタッフの運営等の視察

6月から各自あかりアート作品の研究・制作を行い、作品の質の向上を目指した。模型作品は1人当たり10作品程度制作を行い、その中から展覧会への出展作品を決定した。当日のボランティアスタッフによる運営を視察するために、準備段階から見学した。展覧会では、優秀作品として入選3点、買い上げ作品が2点と好成績を残した。



↑ 作品講評会の様子

②「あかりアート作り教室in茨城大学」

日時：2013年12月8日（日）13:00-16:00
場所：茨城大学教育学部棟C101（工芸演習室）
内容：あかりアート作品をプロジェクトスタッフが指導し制作を体験してもらった。

小学生から60代までの幅広い年齢層の方12名に参加してもらい、実際にあかりアート作

品を制作してもらった。最初は戸惑っている参加者もいたが、プロジェクトスタッフによる指導によって、各々のイメージを固め、完成度の高い作品を作ることができた。小学生には難しい内容かと思われたが、子供ならではの柔軟な発想を手助けすることで、誰よりも早く作品の完成することができた。教室で行ったアンケートではほとんどの参加者から「あかりアートをととても身近に感じた」という回答を得た。



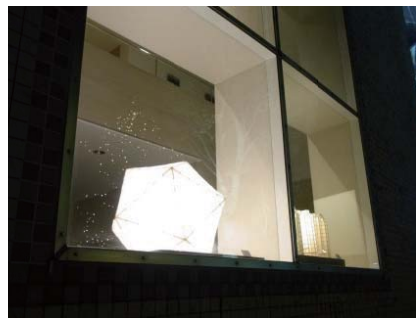
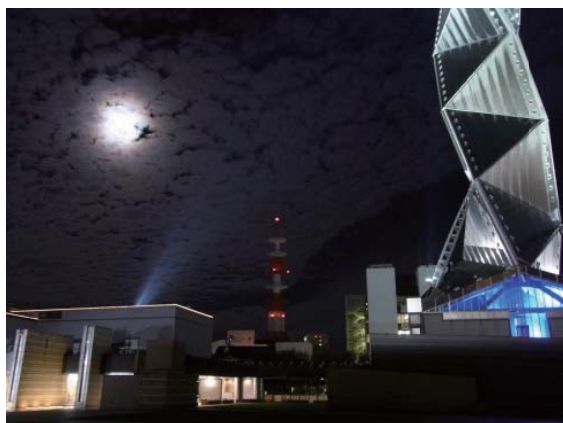
↑ あかりアート作り教室の様子

③「あかりアート作品展示in水戸芸術館」

日時：2013年12月14日（土）、12月23日（祝月） 16:00~21:00
場所：水戸芸術館
内容：水戸芸術館の「クリスマスコンサート」と合わせて、西ノ内和紙で制作し

たあかりアート作品、あかりアート作り教室参加者の作品を展示した。

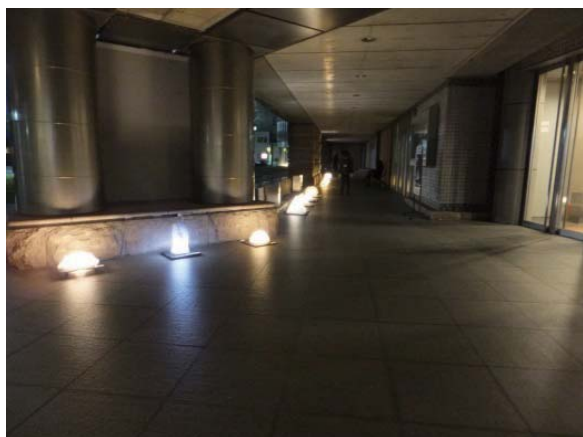
美濃和紙あかりアート展に出展した作品を西ノ内和紙で改善し、「あかりアート作り教室」にて制作してもらった作品と共に水戸芸術館の会議場窓側および回廊部分にて展示をした。両日ともに他のイベントと同時開催という形で行ったことで、より多くの人にあかりアートに触れてもらう機会を作ることができた。また、あかりアート作り教室の参加者は、展示されている自分の作品を多くの人に見てもらえたことにとっても満足していた。連携先の水戸市役所地域振興課をはじめ、共催した芸術館の方々からも高い評価を得ることができた。



↑ 水戸芸術館での展示の様子

「あかりアート」作品をイベントに展示することで、あかりに彩られた魅力的で非日常的な空間が生まれ、いつもと違う水戸の街がつくりだされた。水戸の持つ歴史や文化、人々のにぎわいなど、普段何気なく見ている風景の中には、魅力がまだ隠されている。「あかりアート」を通して、水戸の街の魅力を再発見・再認識することで、地域への思いが更に強くなる機会を設けることができたと思う。

さらに、「あかりアート」が作り出す幻想的な雰囲気によって、イベントの活性化も望めた。ひかりのオブジェとして、地域住民が「あかりアートづくり教室」で作った作品を見に、多くの人々がイベントに会場することができた。



●今後の展望

一年間のプロジェクトの活動を終え、連携先の地域振興課や水戸芸術館の方から、今後も続けて欲しいと言ってもらえた。また、ワークショップ参加者からも、非常にいい経験ができたという感想をいただいた。

2月17日に行われたプロジェクト報告会で私たちの活動に共感していただいた常陸太田市の政策企画部の方々からも、「是非自分たちの街でも行ってほしい」という提案をしていただいた。今後、より多くの方にあかりアートを身近に感じられる機会を作っていきたい。「あかりアート作り教室」のような体験型のワークショップを催すなど、より地域の人々との交流を深めていきたい。

茨城大学地質情報活用プロジェクト —茨城県北ジオパークを通じた地域貢献—

教育・研究

地域交流

代表者：理学部理学科 4年 前田 知行

連携先

対象地域：茨城県北茨城市・高萩市・大子町
連携先：筑波銀行『あゆみ』プロジェクト、
北茨城市、北茨城市教育委員会、
北茨城市観光協会、大子町、大子
町観光協会、大子町商工会、大子
町教育委員会

顧問教員

天野 一男（理学部 教授）

参加者

前田 知行（理学部 理学科 地球環境科学
コース 4年）
池戸 熙邦（ ” ” ）
石川なつみ（ ” ” ）
菊田 亮太（ ” ” ）
郡山 鈴夏（理学部 理学科 地球環境科学
コース 3年）
小沼 早織（ ” ” ）
松久 祐子（理学部 理学科 学際理学コー
ス 2年）
福永 智恵（理学部 理学科 地球環境科学
コース 1年）
澤畑優理恵（理工学研究科 理学専攻 地球
環境系 修士 1年）
古川 陽平（理工学研究科 理学専攻 地球
環境系 修士 2年）
細井 淳（理工学研究科 宇宙地球システ
ム科学専攻 博士 2年）

プロジェクトの申請内容

▼背景

従来から地質情報は防災などに活用されてきた。近年、科学的に重要な地質遺産を見所とし、地域の文化や教育・観光などと関連させて地域振興を目指すジオパーク（ユネスコ支援）が各地に設立され、地質情報を地域振興に役立てる事業が展開されている。

本プロジェクトはこれまでに茨城県北周辺地域において、「地質観光まっぷの作成とそのマップを用いたツアーを実施し、地域貢献活動を行ってきた。2010年の茨城県北ジオパーク推進協議会発足後は、マップや看板の作成、ツアー実施等で茨城県北ジオパークも活動に貢献し、2011年9月、茨城県北ジオパークは日本ジオパークに認定された。これらの活動は全国地質調査業協会奨励賞（2008年）、日本地質学会学術大会優秀ポスター賞（2008年、2010年）、日本地質学会関東支部功労賞（2012年）を受賞するなど外部からも高い評価を得ている。

本プロジェクトは一昨年まで学生地域参画プロジェクトの資金等を中心に活動を展開し、連携先からの資金援助は受けてこなかった。従って、連携先は無償で情報を受け取っており、必ずしも真の連携体制になっていなかった。昨年度は連携先（常陸太田市、日立製作所）から印刷費、看板作成費を出資してもらい、本格的な地域貢献活動を展開することができた。

▼目的

昨年度の連携の経験を活かし、本年度は“産官学金民”の理想的な連携体制のもとで茨城県北ジオパークの活動を支援し、地域振興への協力を行うことが目的である。具体的には茨城県北ジオパーク推進協議会メンバーの自治体と協賛団体である「筑波銀行」には費用面の負担や地権者との交渉・事務的手続きを行って頂き、地元ジオパークガイド（インタープリター）の方々には様々な地元情報を提供して頂くなど役割分担を明確にして連携活動を展開することとした。当プロジェクトは地質・地形の情報提供とマップなどの図を作成し提供する役割をする。

▼活動内容及び期待される成果

①看板作成

茨城県北ジオパークは観光拠点となる各ジオサイトに、その地域全体を紹介する看板が1つある。しかし、地域内にある見所（ポイント）には看板が無かった。そこで北茨城市、筑波銀行と連携し、五浦海岸ジオサイトに各見所を紹介する看板を作成した。ジオサイトのポイント毎に看板が設置されることで、訪れた観光客へのより良い案内情報を提供することが出来るものと考えた。

②「地質観光マップ」の修正

ジオパークは“地質”と“動植物、歴史・文化”の関係が重要である。しかし茨城県北ジオパーク認定前に作成したマップは地質情報の

“観光情報化を目的に作成されたため、これらの情報が乏しく、ジオパークのマップとして必ずしも適しているとは言えない。そこで各地の地元ジオパークガイド（インタープリター）と連携し、動植物や歴史・文化などの情報の提供して頂き、マップの内容向上を図る。今年度は、「袋田の滝」「五浦海岸」「花貫溪谷」の3つを修正する。修正後のマップは茨城県北ジオパークの公式マップとして使用される他、インター

プリターに使用してもらい、従来以上に活用頻度が上がるものと予想される。

プロジェクトの実施概要

▼主な活動内容

今年度の本プロジェクトの活動概要は、以下の3つである。

(1) 看板作成

北茨城市、筑波銀行と連携し、茨城県北ジオパークのジオサイトの見所を紹介する看板データを作成した。看板は当初、五浦海岸ジオサイトに看板を4カ所（五浦岬公園、六角堂、わすれじ平和の碑、北茨城市漁業歴史資料館よう・そろー）設置予定だったが、北茨城市と筑波銀行との綿密な検討を行い、北茨城市・常磐炭田ジオサイトに新たに1カ所（十石堀親水公園）看板を設置することができた。看板の中身は、地質情報に写真や図を加えた他、歴史・文化も多く取り入れたことで、一般の方にも理解しやすい内容にした。



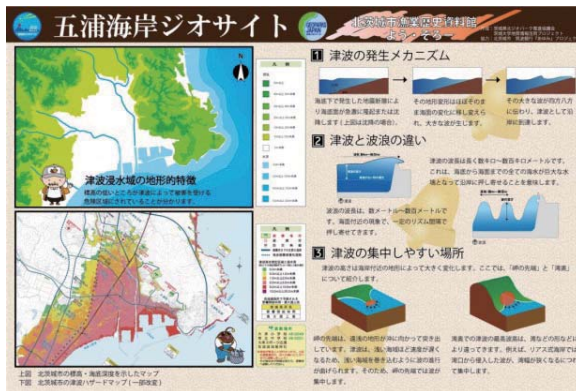
▲五浦岬公園に設置する看板



▲六角堂に設置する看板



▲わすれじ平和の碑に設置する看板



▲北茨城市漁業歴史資料館よう・そろーに設置する看板



▲十石堀親水公園に設置する看板



▲筑波銀行、北茨城市との打ち合わせ

(2) 「地質観光マップ」の修正

ジオパークのマップとしてより適したものに
 するため、地質・地形と動植物、歴史、文化の
 関係に重点を置いた内容のマップへと修正した。
 修正にあたって、地元ジオパークガイドである
 インタープリターと連携し地質・地形と関わり
 のある動植物、歴史、文化などの情報を提供し
 て頂くことで、マップの内容向上を図った。作
 成したマップはジオツアーに用いる他、茨城県
 北ジオパークの公式マップとして役立てること
 とした。以下、今年度修正をしたマップと具体
 的な修正内容の紹介である。

袋田の滝

既存のマップは、地質情報の他に、大子の温
 泉・特産品・動植物などが多く取り入れられて
 おり、ジオパークのマップとして適切な内容が
 載せられていた。しかし文章量、情報量が多く、
 使いにくかった。そこで情報を整理し、重要な
 情報のみをマップに掲載し、詳細な情報をQR
 コード内に移すことで、わかりやすく、見やす
 いマップへと修正した。



▲「修正前（2008年）の袋田の滝」マップ面



▲「修正後の袋田の滝」マップ面



▲「修正後の五浦海岸」マップ面

花貫溪谷

従来の情報に、高萩市の植物や歴史など新たな情報を付け加え、内容を整理した。やや難しい地質・地形の情報は、図示することでわかりやすくした。詳細な情報はQRコードに入れ、マップは重要な情報のみ載せられた見やすいマップに修正できた。

五浦海岸

近代日本美術の発展に大きく貢献した岡倉天心、太平洋戦争で日本軍の作戦の一つである風船爆弾など「文化」と「歴史」を地質・地形と結びつけた情報を多く取り入れたことで、非常にわかりやすく面白い内容に修正できた。また、これらの情報に加えて五浦海岸周辺の観光情報も取り入れた。



▲「修正前（2008年）の花貫溪谷」面



▲「修正前（2008年）の五浦海岸」マップ面



▲「修正後の花貫溪谷」表紙面

(3) 茨城県北ジオパークのPR活動

①2013/5/25 (土)：ばんとうホコテン

茨城県坂東市で行われた歩行者天国において、ブースを出展し、一般市民の方々に茨城県北ジオパークの宣伝を行った。



▲ばんとうホコテンの様子

②2013/6/26 (水)：茨城新聞に掲載

茨城新聞の一面に、本プロジェクトの活動内容を掲載して頂いた。



▲茨城新聞に掲載

③2013/10/12 (土)：ノルディックウォーキング

北茨城市で行われたノルディックウォーキングに参加し、一般参加者へ地質的説明を行った。



▲ノルディックウォーキングで一般の参加者へ説明している様子

④2013/11/3 (土)～11/4 (日)：ジオパーク 関東地区茨城大会

関東周辺のジオパークが集まる大会に本プロジェクトが参加し、大会のサポートを行うとともに、本プロジェクトの活動や茨城県北ジオパークの宣伝を行い、他のジオパークへ情報を発信・共有した。

プロジェクトの成果報告

今年度の特記すべき成果は下記の4つである。

(1) 看板作成

五浦海岸には五浦海岸ジオサイトを紹介した看板はあるが、ジオサイト内の見所を紹介した看板はなかった。そこで見所を紹介した看板を設置したことで、地質観光まっぷを持っていなくても情報を提供できる手段が増えた。これらの看板の内容を地質・地形の情報だけでなく、北茨城市の文化・芸術・歴史といった情報も混ぜることで、地質・地形に親しみのない方々でも興味を持っていただける看板にした。現在作

成した看板を使った新たな観光ツアーを筑波銀行、北茨城市と打ち合わせを行っている。そうすることで、北茨城市の魅力を発信でき、同市での更なる地域活性化が見込まれる。

(2) 地質観光マップの修正とその印刷費

既存の地質観光マップに、地元ジオパークガイドであるインタープリターの方々から歴史、文化、芸術等の情報を提供して頂いたことで、よりジオパークのマップとして適したものになった、また地質・地形の情報を整理し、図を使って説明したことで、見やすく、わかりやすいマップになった。今後これらの修正したマップは、ジオツアー時に使用することで、今まで以上に多くの方々に見て頂けると考えている。なお、地質観光マップの印刷費用は、各市町村に負担して頂けるように打ち合わせを行っている。大子町に関しては、印刷費用として20万円を出資して頂き、大子町にて印刷を行う。

(3) 各種イベントの参加とジオパークワークショップでの意見交換

連携先である筑波銀行が主催するばんとうホコテン、北茨城市・筑波銀行主催のノルディックウォーキングへの地質的解説の補助、ジオパーク関東地区茨城大会でのブース出展など、多くのイベントに参加し、プロジェクトをアピールするだけでなく、茨城県北ジオパークの宣伝にもつながった。ジオパーク関東地区茨城大会では、他ジオパークの方々から依頼のお声をかけて頂いた。このように、他ジオパークから依頼を頂けるようになった背景に本プロジェクトの認知度の増加が考えられる。

(4) 金融機関や地方自治体との連携

北茨城市の看板作成や地質観光マップをそれぞれ金融機関や地方自治体と理想的な連携が図れたことは、本プロジェクトの認知度が高まり、さらに外部から評価されたことが考えられる。

「障害のある人への就労支援プロジェクト ～地域と障害のある人とのつながりをつくる～」

教育・研究

地域交流

課外活動

代表者：人文学部社会科学科 3年 星川 知世

連携先

全国障害者問題研究会（全障研）・茨城支部、茨城県下の特別支援学校、障害者雇用支援法対象企業（N T K石岡ワークス株式会社、エフピコ愛パック株式会社、株式会社茨城ピジョンリサイクル）、茨城県下の社会福祉施設（社会福祉法人白銀会、知的障害者授産施設しろうがね苑、障害者就業・生活支援センターかい、社会福祉法人あすなる園、社会福祉法人ユーアイ村ユーアイキッチン）、茨城県下の障害者団体（茨城県ダウン症協会）

顧問教員

土屋 和子（人文学部・講師）

参加者

星川 知世（人文学部社会科学科 3年）
國谷 郁実（人文学部社会科学科 3年）
藏本 大夢（人文学部社会科学科 3年）
角田 恒平（人文学部社会科学科 3年）
牛田 大暉（人文学部社会科学科 4年）
赤津 圭子（人文学部社会科学科 4年）
岩渕 宗成（人文学部社会科学科 4年）
三村 貴大（人文学部社会科学科 4年）

プロジェクトの申請内容

●目的

就職を希望する障害のある人と法定雇用率を満たしていない企業を結び付けること

●プロジェクト立ち上げの背景

昨年（平成24年）度、私たちは学生地域参画プロジェクトに採択されなかったが、自分たちでプロジェクトを進め、障害のある人の就労を考える学習交流会を開催した。学習交流会は障害のある人とその家族、地域連携先らの交流の場となった。また、私たちが作成した障害のある就労者へのインタビュー動画の公開も行った。この動画は、地域連携先の方が第21回発達保障研究集会で公開した結果、高い評価を得ることができた。しかしながら去年は資金不足のため、学習交流会が一度しか開催できなかった。また、取材交渉には経費がかかるため、取材先が制限されてしまった。今後はさらに新しい取材先を切り開き、プロジェクトを発展させたいと考えている。

●プロジェクトの内容

- ①県内で障害のある人を雇用している企業や一般就労している障害のある人へインタビューを行い、その様子を動画で撮影し、公開する。
- ②学習交流会及び動画鑑賞会、シンポジウムを2回開催し、地域住民や企業、障害のある人とその家族、地域連携先、学生の交流の場を設ける。うち1回は茨苑祭で開催し、200名程度の学生や地域住民の参加を募る。

●連携の方法

私たちは取材の対象として様々な障害のある人、特徴ある企業を取り上げたいと考えている

が、対象者の選定の際はプライバシー保護、人権擁護、企業秘密への配慮等、様々な対処が求められる。そのため、全障研茨城支部等、地域連携先の専門的助言を得ながら活動する。

茨苑祭では、福祉施設理事長及び職員、障害のある人を雇用している企業の社員、障害のある就労者を講師として招き、講演会及びシンポジウムを開催する。

●実施計画

6月～8月 機材購入、取材先との打ち合わせ
(動画の撮影日時・場所・対象者の決定、インタビュー内容の確認)

8月～9月 取材実施(エフピコ愛パック株式会社、社会福祉法人希望会あすなろ園など)及び動画編集作業

10月～11月 茨苑祭でのシンポジウムと交流会の準備及び実施

11月～12月 学習交流会の準備及び実施

1月～2月 活動内容の分析、報告書の作成、来年度の計画

●期待される成果

- ①学習交流会及び動画鑑賞会の開催は、地域住民や学生、企業などに障害のある人の就労の実態を発信し、関心を持ってもらう機会となる。
- ②県内で障害者雇用に積極的な企業を紹介することで、今後の障害者雇用の促進につながる。
- ③障害のある人の就労を支える人々の連携を深め、新たなネットワークを形成する。

プロジェクトの実施概要

7月～8月	機材購入、取材先との打ち合わせ
9月8日	エフピコ愛パック株式会社・茨城工場における フロアホッケー体験・取材の打ち合わせ
9月27日	エフピコ愛パック株式会社・茨城工場、株式会社茨城ピジョンリサイクルへの取材 社会福祉法人あすなろ園への訪問
10月18日	NTK石岡ワークス株式会社、知的障害者授産施設しろがね苑、障害者就業・生活支援センター「かい」への取材・シンポジウムの打ち合わせ(1回目)
11月8日	NTK石岡ワークス株式会社、知的障害者授産施設しろがね苑、障害者就業・生活支援センター「かい」への取材・シンポジウムの打ち合わせ(2回目)
11月9日	茨苑祭にて、シンポジウム「障害のある人と共に働く～現場から見えること～」を開催
11月11日	茨城県立内原特別支援学校の学校公開に参加 講演会の聴講「夢、実現へのメッセージ」 株式会社茨城ピジョンリサイクル 細川智絵子さん
11月17日	「第3回あつまる、まじわる、つながるー地域のサステナ活動をつなぐワークショップー」参加

11月17日	全国障害者問題研究会・茨城支部 船橋秀彦さんと学習交流会の打ち合わせ
11月24日	茨城県ダウン症協会主催「ダウン症フォーラム」への参加
11月28日	社会福祉法人ユーアイ村 ユーアイキッチンへの訪問・取材
12月7日	「障害のある人の就労を考える学習交流会～特例子会社の意義とは～」開催

私たちは、目的達成ため「取材及びインタビュー動画制作」、「学習交流会及び動画鑑賞会、シンポジウムの開催」、「地域連携」の3つの活動を実施した。

●取材及びインタビュー動画制作

①取材

企業や福祉施設に取材交渉を行い、計7つの取材先に訪問した。取材の際は、プライバシー保護、人権擁護、企業秘密へ配慮をした。

【取材先一覧】

企業… 2社

- ・ NTK石岡ワークス株式会社
- ・ 株式会社茨城ピジョンリサイクル

福祉施設… 5事業所

- ・ エフピコ愛パック株式会社茨城工場
- ・ 社会福祉法人あすなろ園
- ・ 知的障害者授産施設 しろがね苑
- ・ 障害者就業・生活支援センター「かい」
- ・ 社会福祉法人ユーアイ村 ユーアイキッチン



取材時の様子

②動画制作

企業2社、福祉施設2事業所で、インタビューの様子や社内、施設の様子を約6時間撮影した。編集作業の後、2本の動画作品を作った。

【制作した動画作品】

・動画1

「働くチカラ～NTK石岡ワークスの取り組み～」(約20分)

〈出演者〉

NTK石岡ワークス株式会社

事業管理責任者 下條さん

障害のある社員 宇田さん 成田さん

障害者就業・生活支援センター

就業支援ワーカー

梶山さん 飯田さん

・動画2

「共に働く～エフピコグループの取り組み～」

(約20分)

〈出演者〉

株式会社茨城ピジョンリサイクル

係長 細川さん

障害のある社員 檜物谷さん

エフピコ愛パック株式会社茨城工場

サービス管理責任者 山本さん



インタビュー動画撮影時の様子

●学習交流会及び動画鑑賞会、シンポジウムの開催

学習交流会及び動画鑑賞会、シンポジウムを2回開催した。開催の約3ヶ月前から企画、会場の手配、講師の依頼と打ち合わせ、動画の制作、広報活動をした。当日は学生が司会、運営、動画公開をした。

①平成25年11月9日(土)

シンポジウム「障害のある人と共に働く～現場から見えること～」

茨城大学水戸キャンパスにて開催

・内容

第1部

働く障害のある人の事例に学ぶ

(13:00～13:40)

・NTK石岡ワークス株式会社の動画公開

「働くチカラ～NTK石岡ワークス株式会社の取り組み～」

・「障害のある人が働くということ～当事者の立場から～」講演

NTK石岡ワークス株式会社

宇田勉氏 成田久夫氏

第2部

シンポジウム「障害のある人と共に働く～現場から見えること～」(13:45～14:50)

・「障害のある人の雇用の現場

～NTK石岡ワークス株式会社の取り組み～」

NTK石岡ワークス株式会社

事業管理責任者下條拓也氏

・『『かい』における、障害のある人への就労支援と生活支援」

障害者就業・生活支援センター「かい」

就業支援ワーカー

梶山剛史氏 飯田祐介氏

第3部

ミニ講演「障害のある人が豊かに生きる社会のために～わたしたちにできること～」

(15:00～15:30)

社会福祉法人白銀会

理事長長谷川浅美氏

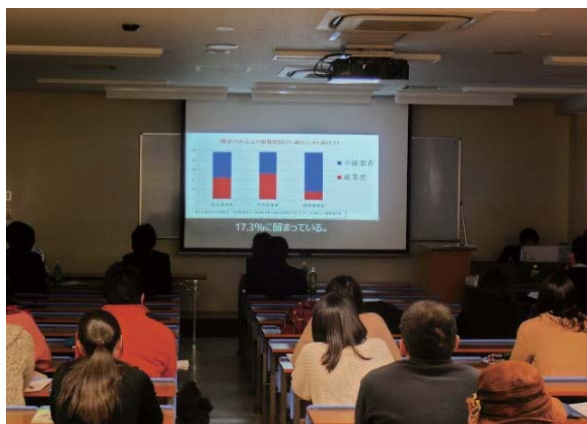
・参加者

計44名(障害のある人と家族、大学生、福祉施設職員、特別支援学校教員、企業関係者、

会場の近くにお住まいの方、大学関係者、高校生)

・講師、シンポジスト

講師、シンポジストは、取材協力先の企業の社員、福祉施設職員、社会福祉法人理事長に依頼した。障害のある社員の報告の場も設け、当事者の声を発信することができた。



シンポジウムの様子



講師とプロジェクトメンバーの集合写真

②平成25年12月7日（土）

「障害のある人の就労を考える学習交流会～特例子会社の意義とは～」

結城市民情報センターにて開催

・内容

第1部 障害のある人の事例に学ぶ

(13:00～14:00)

動画公開

「働くチカラ～NTK 石岡ワークス株式会社の取り組み～」

「共に働く～エフピコグループの取り組み～」

第2部 シンポジウム (14:10～15:40)

報告①

「NTK 石岡ワークス株式会社の取り組み」

NTK 石岡ワークス株式会社

事業管理責任者 下條拓也 氏

報告②

「株式会社茨城ピジョンリサイクルの取り組み」

株式会社茨城ピジョンリサイクル

係長 細川智絵子 氏

報告③、④

「障害者雇用を学んで～学生の視点から～」

茨城大学人文学部社会科学科

4年 牛田大暉 3年 星川知世

・総括 茨城大学人文学部 教員 土屋和子

・参加者

計22名（障害のある人と家族、大学生、福祉施設職員、特別支援学校教員、企業関係者、大学関係者、特別支援学校の学生）

・シンポジスト

シンポジストは、取材協力先の企業の社員に依頼した。また、プロジェクトメンバーの学生2名もシンポジストとして参加し、活動の報告と意見交換を行った。



講師とプロジェクトメンバーの集合写真

●地域連携

地域のワークショップやボランティアに参加し、幅広い地域住民と連携を深めた。

11月17日に参加した「第3回あつまる、まじわる、つながる一地域のサステナ活動をつなぐワークショップ」では、優秀発表団体として、2位に表彰された。



ワークショップ参加メンバーと表彰状

プロジェクトの成果報告

●今年度得られた成果

本プロジェクトの成果は、以下の3点である。

成果① 動画制作

私たちが取材で得た障害者雇用に関する有益な情報を、動画によって発信することで、障害者雇用の後押しをすることができた。広く情報を発信するため、本プロジェクトのホームページを作成し、制作した動画を掲載した。今後は、連携先のホームページにも動画を掲載予定である。



本プロジェクトのホームページ

<https://sites.google.com/site/ibadaisyakaihosyouthouzeimi/>

【動画を見た連携先のアンケート結果】

質問

本プロジェクトを通して、企業や福祉施設内に、障害者雇用に関してどのような変化が生まれましたか？

回答

- ・障害のある社員の人生設計について、会社として取り組むようになった。雇用安定のため、社員の障害基礎年金取得に向けて取り組み始めた。（企業）
- ・企業に対する障害者雇用の支援の課題がわか

った。(福祉施設)

成果② 情報発信

障害者雇用の実態を、インタビュー動画、シンポジウム及び学習交流会、ホームページで発信した。地域の方々に障害のある人の就労の実態を発信することで、関心を持ってもらう機会となった。

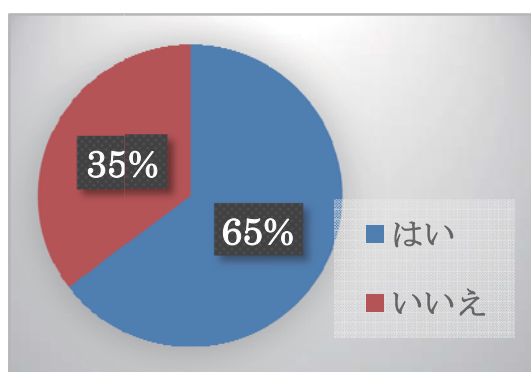
【シンポジウム、学習交流会の参加者、講師のアンケート結果】

質問 1

参加後、障害のある人の就労への考え方に変化はありましたか。

回答 1

はい→65% いいえ→35%



質問 2

質問 1 で「はい」と答えた方へ
障害のある人の就労への考え方に、どのような変化がありましたか。

回答 2

○大学生、地域住民から
・障害のある人の就労の厳しさを初めて知った。
・「障害を持つ人との接し方は、もし自分がその障害を持っていたらと考えることが重要」と

いう意見は、これから自分も障害を持つ人と関わることもあるかもしれないので、忘れずに覚えていたい。

・自分が思っていた以上に企業と障害者の方との関係が密接であるということを感じた。

○企業、大学関係者から

・障害のある人の就労の可能性を知ることができた。
・今後も障害のある人の雇用を継続したい。

○障害のある人の家族から

・企業が障害者雇用に前向きな姿勢ということがわかった。
・講師をした障害のある人が将来のこともしっかり考えていて、見習いたいと思った。

質問 3

本プロジェクトは、障害のある人の就労にどのように役立つと思いますか。

回答 3

○講師から

・障害のある人の就労を地域の方に知ってもらえた。
・これからを担う学生に障害者雇用について知ってもらえたことが大きい。
・学生がこのようなテーマで活動することは、社会に大きな影響を与えるので、ぜひ続けてほしい。

○参加者から

・障害をもつ子の親にとって、励みになる。
・障害者雇用の理解につながる。多くの人に発信してほしい。

成果③ 新たなネットワークの形成

私たちは、プロジェクト活動をする中で、企業、福祉施設、特別支援学校、家族、地域住民など、障害のある人の就労を支える人々の多さを知った。しかし、それぞれの交流が少ないことから、障害のある人の就労を支える人々の新たなネットワークをつくる必要性を感じた。そこで、学習交流会等の開催、地域のイベントへの参加を行い、障害のある人の就労を支える人々の連携を深め、新たなネットワークを形成することができた。

また、県内の福祉施設234事業所（就労継続支援事業所A型、B型、就労移行支援事業所）にはシンポジウムの案内等を送付し、本プロジェクトの活動を発信した。その結果、福祉施設から取材依頼やパンフレットが送付されるなどの反応があった。今後も、さらに連携を深めていきたい。



障害のある人を支える人々のネットワークのイメージ図

【シンポジウム、学習交流会の参加者の感想】

- ・福祉施設理事長の話を聞く機会がなかったため大変勉強になった。（企業）
- ・福祉施設のイメージが変わった。（特別支援学校）

●今後の展望

私たちは、今年度の活動を通して、障害のある人の就労の実態を知るとともに、障害のある人の人権について考える機会となった。また、障害者雇用の情報発信に対する地域からの反応に、手ごたえを感じる事ができた。

今後は、障害のある人の就労上のニーズをさらに吸い上げ、プロジェクト活動を深めていきたい。また、今年度の活動を通してできたつながりをさらに強くし、活動を発信していきたい。そして、次年度は他学部の学生にもプロジェクトメンバーへの参加を呼びかけ、多角的な視点を取り入れたい。

異文化交流プログラム

教育・研究

国際交流

地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 2年 星野由季菜

連携先

盛金WAC協議会
茨城キリスト教大学

顧問教員

杉本 妙子（人文学部 教授）

参加者

浦井 晴香（茨城大学・人文学部・人文コミュニケーション学科）
木村 優希（茨城大学・人文学部・人文コミュニケーション学科）
清野 絢（茨城大学・人文学部・人文コミュニケーション学科）
比屋根 利紀（茨城大学・人文学部・社会学科）
星野 由季菜（茨城大学・人文学部・人文コミュニケーション学科）
劉 勁詩（茨城大学・人文学部・社会学科）
鴨志田 渉（茨城キリスト教大学・文学部・現代英語学科）

プロジェクトの申請内容

●プロジェクト概要

私たちは「異文化を知るきっかけとして異文化交流の機会を作り、日本人及び外国人の相互理解を図る。また茨城県内の大学、水戸市周辺の高校生、市民の参加を募り地域貢献に努める。」という国際交流・地域貢献の二点を目的として二つの企画を実施した。

一つ目に常陸大宮市を舞台に地域交流活動を行っている盛金WAC協議会と連携し、「世界に触れよう！地域に触れよう！地域・国際交流合宿@常陸大宮」を行った。当合宿を通して留学生に大学生や現地の方々の異文化交流の機会をつくること、並びに学生が観光や異文化体験を通してその地域に関心を持たせ地域貢献に努めることを目的とし実施した。

二つ目に「海外を近くに感じよう！2013」という国際交流学生フォーラムを、高校生を対称として茨城大学で開催した。当企画は若い世代の海外への関心が高まり世界へ視野を広げるきっかけ作りを目的とし、留学体験談の発表や座談会、国際交流ゲームなどを実施した。

●目的

国際交流・地域貢献

●目標

本プロジェクトの「地域貢献・国際交流」の目的を達成すべく「異文化交流の機会が少ない学生や市民に交流の場の提供。」と

「学校やテレビ、本などでは知ることが出来ないことを、実際の交流を通じて直接的に感じ、知ることが出来る場を提供。」を目標とする。

●期待される成果

国際交流合宿で寝食を共にすることにより、日本人と外国人の相互理解が深まる。また、道中で地域の方々や盛金WAC協議会の方々との交流が期待される。国際交流フォーラムでは、

日本人学生や高校生に異文化に触れる機会を提供することで海外への関心を高め、彼らが直接・間接の体験によって世界へ視野が広がること期待される。また、このフォーラムを通して得た知識、経験を地域へ還元することにつながるものと考えられる。

プロジェクトの実施概要

地域・国際交流合宿@常陸大宮

- 7月上旬 当日の具体的な企画案作成
中旬 盛金WAC協議会、その他との交渉
8月中旬 常陸大宮市、大子町現地見
9月上旬 当日の企画スケジュールの決定
参加者募集開始、ポスター作製
下旬 参加者決定、追加募集
しおり、当日の資料類作成
10月上旬 参加者最終決定
10月5-6日 合宿開催

国際交流学生フォーラム 海外を近くに感じ

よう！2013

- 7月下旬 昨年度の企画内容の見直し
8月～9月 当日の具体的な企画案作成
10月中旬 ポスター、チラシ作製
各高校へ参加者募集開始
11月中旬 参加者募集締め切り・決定
11月下旬 参加者に向けて案内状送付
12月上旬 当日の資料類作成
12月8日 フォーラム開催

プロジェクトの成果報告

●今年度得られた成果

◇一つ目の企画である国際交流合宿では茨城大学、茨城キリスト教大学、常磐大学から計29名（内留学生7名）が参加し、二日間に渡り開催した。合宿を通して異文化体験と国際交流及び大学間交流が行われ、参加者の現在も続く大学

間の繋がりを生み出すことができた。また文化体験では留学生だけではなく日本人にとっても初めての経験を与えることができた。成功要因として文化体験先の地域の方々の対応、また運営側が親睦を深めるために多くのグループ活動を企画したことが挙げられる。

一方で地域間交流については課題が残った。その原因として生徒間が交流する機会が重点化され、地域の方々と活動を通じた交流はあったものの、語り合うような場を設けることができなかったことがあげられる。この点は連携先である盛金WAC協議会の方も言及しており、国際交流に比べ地域交流の不十分さをご指摘いただいた。地域の方々が学生に何を求めているか、を事前に調査したうえで合宿の内容を設定することで、より活発に地域交流を行えたのではないかと反省が上がった。この合宿において国際交流と地域交流の両立の難しさを感じさせるものであった。



「地域・国際交流合宿 集合写真」



「合宿 常陸大宮市 紙の里 漉き絵体験」



「合宿 大子町 袋田の滝 観光」



「フォーラム 座談会の様子」

◇二つ目の企画の国際交流フォーラムでは大学生42名（内留学生18名）、高校生44名の計86名が参加する大規模な企画となった。今回のフォーラムは終日行われ、多くの高校生に異文化交流の経験や海外に関する知識などを得てもらうことができた。事後アンケートの結果からも高評価が見受けられ、高校生の約9割がフォーラムに対して概ね満足したと回答。また国際交流以前に、大学生側は大学で学んだことや自らの経験を地元地域の高校生に与えることができた。また昨年度に行われた当企画の前身である国際交流フォーラムと比較しても、参加人数や参加規模、実施内容を発展させることができた。

当フォーラムの目標の一つである若い世代へ海外の関心をもってもらえることは達成することができた。地域貢献の面において今後それが地域に還元されるかは定かではないものの、地域の高校生にグローバルな視野を与える一助になったという点において、今回のフォーラムが地域貢献に多少なりとも寄与したものとする。

当プロジェクトをきっかけとして新しく作ることができた大学間、地域間とのつながりは今後活動していく際にも、大きな成果だと考える。



「フォーラム 集合写真」

●外部評価

①合宿アンケート結果

合宿参加者のアンケートの結果、合宿全体の評価として9割以上の方に大変良い、または良いと回答して頂いた。

また、合宿で何が一番良かったかという質問に対して、国際交流と他大学との交流が全体の5割占めているように(図1)、主な感想としては「文化体験と国際交流が一緒にできて良かった」「他大学の人たちや留学生と楽しい時間を過ごすことができた」などが挙げられた。合宿を通して参加者同士の交流のきっかけを作ることができたと思われる。

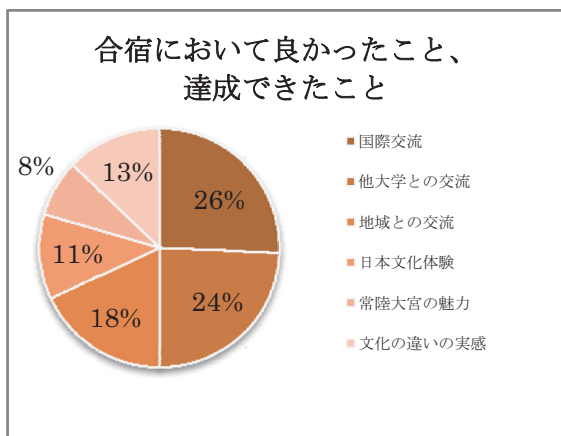


図1

②フォーラムアンケート結果

フォーラムに参加した高校生に対するアンケートの結果、フォーラム全体の評価としてほぼ全ての方々に良い、どちらかというとも良いと回答して頂いた。

フォーラムを通じて海外を近くに感じることができたかという質問に対し、9割以上の方ができた、どちらかというともできたと回答しているように(図2)、フォーラム全体として印象的だったこと、良かったこととして、「本場の言葉を聞いて海外に行きたくなった」、「留学体験談を聞いて留学について興味を持てた」、「座談会で文化の違いや海外の魅力などについて知ることができた」などが挙げられた。フォーラム内の留学体験談、座談会などが高校生に海外に興味をもってもらうきっかけとなったのではないかと思われる。

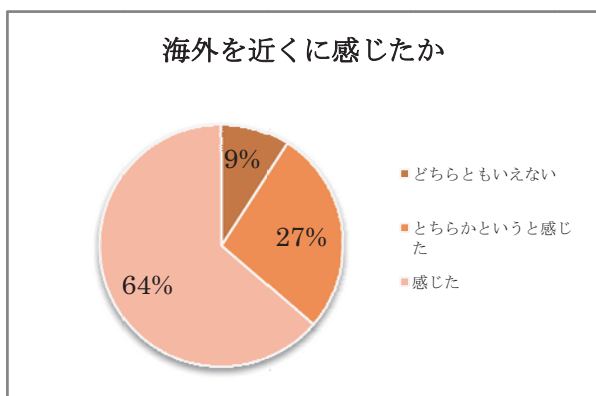


図2

また、参加した留学生と日本人大学生に対するアンケートの結果、フォーラム全体の評価として高校生と同様にほぼ全ての方々に良い、どちらかというとも良いと回答して頂いた。

高校生との交流を通して印象的だったこととして、「自分と同じものに興味関心がある高校生と話す機会がないから、自分も刺激を受けた」、「高校生の意識が高く夢を持っている」などが挙げられた。

フォーラムによって高校生の海外に対する興味や意識の向上だけでなく、高校生との交流によって大学生への新しい刺激の発生を実現できたと思われる。

●今後の課題

今回の企画は国際交流という点ではかなり充実していたが、地域貢献の色が国際交流ほどは濃くなかったという反省がでた。次回同ような企画を行う場合は地域の方々と学生がもっと活発に意見交換ができる場を設け、地域交流をより活発に行いたい。また、今年の参加者は主に学生が中心であったが、例えば水戸市在住の外国人の方にまで広報するなどして、参加者層を拡大することで地域交流の活発化、また、今年とは違った新たな刺激を参加者に与えられるのではという考えに至った。今後も、学生と留学生、地域の交流を企画する際にはこの経験を活かしていきたい。



「合宿 日本文化体験 ベーゴマ回し」



「合宿 キャンプファイヤー」



「フォーラム 留学体験談の様子」



「合宿 そば作り体験」



「フォーラム 国際交流ゲームの様子」



「フォーラム 昼食の様子」

平成25年度優秀プロジェクトの選出

平成26年2月17日（月）に、平成25年度学生地域参画プロジェクト実施報告会が開催され、各プロジェクトチームが活動の内容や成果を発表しました。

その後の審査会による審議を行った結果、平成25年度は、以下のプロジェクトが最優秀プロジェクト及び優秀プロジェクトに選出されました。

平成25年度学生地域参画プロジェクトにおける最優秀プロジェクト

茨城大学地質情報活用プロジェクト
ー茨城県北ジオパークを通じた地域貢献ー
(代表者) 理学部 4年 前田 知行



茨城大学地質情報活用プロジェクト 発表の様子

平成25年度学生地域参画プロジェクトにおける優秀プロジェクト

のらボーイ&のらガールの食農教育
プロジェクトーNo Food, 農 Lifeー
(代表者) 農学部 3年 大野 莉沙



食農教育プロジェクト 発表の様子

大洗応援隊！～情報発信基地&人と人をつなぐ場所「ほげほげカフェ」～
(代表者) 教育学部 3年 小野寺 藍



大洗応援隊！ 発表の様子

平成25年度「学生地域参画プロジェクト」応募要項

1. 目的

茨城大学地域連携推進本部の重視する活動分野の1つである「学生地域参画支援」について、茨城大学学生が地域社会との連携を積極的にすすめられるように、「学生地域参画プロジェクト」を設け、これを支援します。

2. 募集プロジェクト

地域社会と連携した、次の分野のものであること。

- ◆教育・研究プロジェクト
- ◆ボランティアプロジェクト
- ◆課外活動プロジェクト
- ◆地域交流プロジェクト
- ◆国際交流プロジェクト

※なお、サークル活動のための物品購入を目的とした応募はできない。

3. 注意事項

- (1) 卒業論文、卒業研究で取り組む内容のものでないこと。
- (2) 年度内に終了する単年度企画であること。
- (3) 1件あたりの支援額は50万円を上限とし、下限は設けない。
- (4) プロジェクト実施に当たりアドバイスやサポートを行う顧問教員を必ず有すること（申請に当たり、顧問教員と提案内容について十分打ち合わせを行うこと）。
- (5) 物品、施設等については、借用を基本とする。また、購入物品は保管場所・保管責任者等を報告するものとする。
- (6) 消耗品の購入は、原則として平成26年1月15日(水)までとする。
- (7) その他についての照会は、電子メールで茨城大学地域連携推進本部事務局まで。
 - ※会議費（弁当及び飲み物代）は支給しない。
 - ※必要経費内訳については、見積書も添付すること。
 - ※講師謝金の立替払い、物品の立替払いについては不可とする。

4. 応募資格

大学の学生（大学院生・留学生を含む）であること。個人又はグループを問わず、申請が可能。また、教職員と連携して学生が主体で行うものも申請可能。

5. 傷害保険への加入

プロジェクト参加者は、活動が始まる前までに、課外活動中の怪我等に対し保障される保険に必ず全員加入すること。

傷害保険未加入者については、大学の方で（財）スポーツ安全協会のスポーツ安全保険にまとめて加入するが、そのための掛金は、各プロジェクトの配分予算から支払うことになるため、申請の際は必要経費の計上漏れに注意すること。

6. 申請等に関する説明会

平成25年5月22日（水）13：30から、水戸地区理学部K棟1階インタビュースタジオにおいて開催する。

また、テレビ会議システムを利用して、日立地区工学部（E1棟2階第2会議室）、阿見地区農学部（管理棟第一会議室）においても説明会の様子を配信する。

7. 応募方法

所定の「申請書」を作成の上、以下の受付期間内に水戸地区は事務局棟3階・学術企画部社会連携課地域連携係、日立地区は学務第二係、阿見地区は学務係に提出する。

受付期間：5月27日（月）～5月31日（金）10：00～17：00

【申請書様式ダウンロード元】 <http://renkeihonbu.ibaraki.ac.jp/>

8. プレゼンテーション

- (1) 平成25年6月11日（火）10：00から、水戸地区理学部K棟1階インタビュースタジオで行う。
- (2) 1企画当たりのプレゼンテーションの時間は10分とする。
- (3) 審査は(I)プロジェクト内容と支援経費の主旨との整合性、(II)計画の独創性・魅力、(III)計画の実行可能性、(IV)得られる成果・効果等、(V)プレゼンテーションの5つの観点から行う。

9. 採否の発表等

- (1) 採否については、平成25年6月14日（金）に申請代表者全員にメールにて通知する。なお、地域連携推進本部ホームページ、学務部掲示板及び各学部掲示板においても発表する。
- (2) 平成25年6月18日（火）に、採択プロジェクトを対象として、プロジェクト実施に関する説明会を実施する。対象団体の代表は必ず出席すること。
- (3) 平成26年2月17日（月）（予定）に、プロジェクトの実施状況をまとめた報告会を開催する。報告会終了後に開催される審査会において、優秀プロジェクトを選定し、学長表彰の対象プロジェクトとして推薦する。

10. 日程

プレゼンテーション及び審査会実施日	平成25年6月11日（火）10：00～
採否発表	平成25年6月14日（金）
プロジェクト実施説明会	平成25年6月18日（火）13：30～
プロジェクト実施期間	平成25年6月19日（水）～平成26年1月31日（金）
プロジェクト実施報告会	平成26年2月17日（月）（予定）

11. その他

- (1) 地域連携成果を冊子等にまとめて報告する際には、“茨城大学社会連携の助成に拠った、旨を明記するとともに、茨城大学ロゴマークと「社会連携事業会支援事業」を付記すること。
- (2) 報告書等とともに添付された事業風景等の写真は、ポスター、チラシ、報告書等の印刷時に使用する場合がありますので予めご了承ください。
- (3) 報告書は、茨城大学地域連携推進本部のホームページ (<http://renkeihonbu.ibaraki.ac.jp/index.html>) 及び茨城大学図書館ローズリポジトリ (<http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/>) に掲載する場合がありますのであらかじめご了承ください。

12. 問合せ先

茨城大学地域連携推進本部事務局（学術企画部社会連携課地域連携係）

Tel: 029-228-8585

E-mail : renkei@ml.ibaraki.ac.jp